

---

# Sounds

ワッショイkoji

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Sounds

### 【コード】

N6872G

### 【作者名】

ワツシヨイkoji

### 【あらすじ】

主人公ハルキは幼なじみからいやいや軽音部をやること・・・

春風が心地良い。入学式を終えて初の登校日、僕は期待を胸を膨らせていた。がその期待は即潰された。

「おい、ハルキくん。待って。ねえ、ちょ、ちょっと待って立ちこぎしないで」 「何？」

「なあオレと一緒に軽音部入ろうぜ！」

「イヤ、生理的に無理。」

「まあまあ、そういわず幼なじみだろ」

僕は松田ハルキ（15）でこいつは幼なじみの田宮公平。私立大青高校に通っている。そんなごく普通の少年がバカなヤツになぜつきまとわれているかというと、

「なあなあ、バンドやって女子にモテようぜ。」

という下心満載の友の気まぐれなのだ。

「何で僕がやんなきゃいけないんだよ」

「だって幼なじみだし、お前リコーダー吹けるじゃん」 「お前の

楽器出来る基準リコーダーかよっ！！」

「冗談だよw、だってギターできんじゃん」

「できるってもそんな上手くないし、だいたいバンドって二人じゃ無理じゃん」

「そこは、ねえ、なにかしらしてもう二人位連れて来て、オレがドラム、ハルキがギター兼ヴォーカルで、残りでベースとキーボードみたいな。どうよ、完璧なマイ スケジュールは？」 「うーん、無理じゃない？」

「そんなこと言わずに、お願いだよー。泣くぞ、断ったらオレ人目にせず泣くぞ。わかったかコラア！」

「なんで強気なんだよ。わかったわかった、やってやるよ、バンド。」

「おお、さすが親友！よし、それじゃ一緒にまず軽音部作ろう！」

「ん、作ろう？」

「うんだってウチ軽音部ないじゃん、バカだなーハルキはw」

「バカはお前だー！！！」

午前の長い授業が終わり昼休み。ハルキは教室の窓から外をぼーっと眺めていた。はぁ。と自然にため息が出る。すると1人ハルキに近寄ってくるものがいた。

「よっ、ハルキー！」

振り返るとそこには、公平が微笑みながら立っていた。

「はぁ。」

さつきよりも深く長いため息がながれでる。

「何か悩み事でもあんのか？オレが相談のるぜ！」

公平は親指を立てながら言った。

「じゃあさ、軽音部の件やっぱやめてもいい？」

「そいつぁ、無理だぜ！」

公平はまた親指を立てながら明るく言った。

「だって軽音部をいちからなんて聞いてねえよ。第一別に部活じゃなくても、自分達でやりやいいじゃん。」ハルキは言った。すると、

「ハルキ。お前さんちつともわかつちやいねえぜ。」

公平は、

「オレはバンドをやってモテたいんだよ。しかし、その為にはバンドやってるってことをアピールする必要がある。その為に一番簡単なのは、部活としてやることなのだよ、ワトソン君」と得意気に語った。

「じゃ、どうやって部にするんだよ。しかも人数揃えて、楽器も揃えて練習したりして結構大変なんだぞ」

「だから、それは、あれだ。なんやかんやでチヨチヨイとな。」

「さつきまでの計算力はどこへいったのかね、ホームズよ。」  
「はぁ。やはりため息が出てしまう。」

「そんな心配すんなって。どうにかするから。このオレが！」

「いやいや、全然説得力ないから。」

「もうなんだよハルキ。さっきから、ネガティブに物事考えて、だいたいお前だって、昔バンドしたくてギターやってたんじゃねえのかよ。あの頃のお前はとうした？あの頃の輝きはとうした？夢を諦めんのかよ！」

「こ、公平。」

いつもと違う公平にハルキは驚いたと同時に少し不思議とバンドやるのかなあと思う自分がいた。

「なあ、バンドやるうぜ。」公平は改めて問いかけた。

「うん。」

その言葉はふつきれたように自然と口からでてきた。

「そうこなくっちゃ！」

と公平は嬉しそうに

「よし、これから張り切って軽音部作ってバンドして女子にモテるぞー！」

そうだ。こいつの頭の中はモテることだった。

ハルキは公平に心動かされた自分が惨めに思えた。

「くそー。」「えっ？」

「お前僕の感動かえせー！」

「ちよ、待て、ハルキ。わかった、オレが悪かった。だから、その握った拳をほどいてください。」

「うるせえー！」

バキッ！

「ギヤーツ。」

昼休みの教室に断末魔が響きわった。

## e p i (後書き)

全然内容に入れなくてすみません。これから多分進展していくつもりなので、もう少し待ってください。

「よし、まずは勧誘からだな。」

放課後話し合いの結果まずは、メンバーがいなきゃ始まらないというところでメンバー集めをする事になった。

「どうやって集める？」

「ふふふっ。ハルキ。オレに良い考えがあるぜ！」

「へえ、どんな？」

「名付けて『片っ端から誘っちゃう？うん。そうしよう（今ならうんまい棒付）』大作戦だ。どーだ、オレの完璧な計画。」

そうだった、こいつは生粋の馬鹿だった。期待したのが間違이었다。

「そんなの計画でも何でなくて、ただの行き当たりばったりだろうがー！！！」

ハルキは今にも殴りかかる勢いだ。

「ちよつと待ったー！！！」

公平は慌てて止めた。

「そ、そんなこと言われたって、やっぱり勧誘しかないだろ？」

「それもそうだな。」

ハルキは冷静に考え上げてた拳を下ろした。それを見てほっと胸をなでおろす公平。

「そうと、決れば早速勧誘だな。」

「よし、じゃオレは勧誘の為のうんまい棒買ってくるぜえ！」

「オイ！勧誘行け！」

それから1週間後・・・

夕日に染まる屋上に2人の姿があった。

「はあ、全然駄目だ。誰一人入ってくれなかった。」 「ああ、（

シヨリ）まったくだ。（シヨリ）皆野球やらサッカーやら（シヨリ）

誰も話しすら聞いてくれねえ。」 「お前なにさつきからシヨリシヨリシヨリシヨリとうんまい棒食ってんだよ！」 「まあまあ、そんなカリカリせんとはルちゃん。あんたもうんまい棒お食べ。」 公平がうんまい棒<sup>コンボタ</sup>を差し出す。

「うわー、ありがとうおばあちゃん。って食うか！駄目だ。怒り過ぎてノリ突っ込みしてしまった。」

落ち着け、僕。ハルキは冷静になろうと努力した。

「あ、そういえば。」

はっと、思い出したように言った。

「この前音楽の授業の時、オレ先生から頼まれてて鍵開けに早く行っただろ？」 「あゝ。」

公平はこういうやだが、なぜだかクラスのヤツ等に人気がある。そのせいもあってか、学級委員長に選ばれた。ホントこんなヤツを選ぶなんて。

「その時さあ、扉開いててそこにピアノを弾いてる女子が居たんだよ。」

「へえ、じゃあさ。その女子をキーボードに・・・」 「その子がまた可愛いくて可愛いくて。」

公平の顔がム力つくほどにやけてる。こいつ本気で軽音部作る気あるのか？

「おい、公平。」

「あゝん？」

あゝん？ってこいつ（怒）

「その可愛い女子とやらをキーボードに誘ってみたらどうだ？」

「そりゃ、真っ先に誘ったさ。オレと付き合っ下さいって。そうしたら彼女逃げちゃって。」

「いやいや違うだろ！軽音部に誘うんだよ！っつーか、なに初対面で告ってんの？」

「そうか、ナイスアイデア！彼女を誘ってみればいいんだ。よし、早速音楽室行ってみよう。」

「え、今から？」

「ああ、いつも音楽室からピアノの音色が聞こえてるから多分居ると思うぜ。」という公平の言葉を信じて音楽室に向かった。

音楽室前……

「あつ、ホントだ。」

音楽室からピアノの音色が聞こえてくる。

「だろ？しかも……」

「ああ、とても上手い。」

僕はあまりピアノには詳しくないが、確かに美しい音色が音楽室から聞こえてくる。

「よし、いくぞ。」

公平が音楽室の扉を開けた。すると、確かにピアノの前に髪の毛の長い人影が座っていた。

「たのもおー！」

ピタッ。ピアノの音色が止まると同時に人影がこっちをむいた。

「おい、たのもおーって道場破りじゃないんだから……あれ？」

ハルキはその人影に目を凝らした。  
ん？んんっ？まさか。

「へい、その彼女。オレと付き合い……じゃなかった、軽音部はいらない？」

「おーい、この馬鹿野郎。そいつは確かに女っぽいけど、男だぞー。」

公平がぎこちない動きで振り返る。そして叫んだ。

「なんですとー！！！」

音楽室 . . . .

そこで公平は固まっていた。そして重い口を開き

「パードウン？」

「だから、男だって！」 ハルキは答えた。

ピアノの前に座っていた女の子みたいな男子は椎名薫。彼は女の子みたいな顔で結構クラスで有名だった。

「あの〜。僕に何か用ですか？」

薫が僕達に話しかけてきた。声が高くより女の子みたいだった。

「あのさ〜、僕達と一緒にバンドしない？ 軽音部として。実は、コイツが君のピアノを聴いてさあ。 . . . おい！ 公平！」

「んあ？」

公平はショックが大きいのか、気の抜けた返事がかえってきた。ダメだコイツ。

「え、僕が？」

「そう、君が。」

「うーん、どうしよう。」

「その顔で男 . . . もつたいねえ〜。」

まだ言ってる。今度もダメかなあ。と思ったが返ってきた返事は

「うん、いいけど . . . 」。意外や意外前向きな返答。

「えっ、マジ？」

「でも多分後悔するよ . . . 僕いじ」

「えっ、入ってくれるの！」 ワンテンポずれて復活した公平が言った。

「うん、でも . . . 」

「やったー！ キーボード確保！ あと一人ベースじゃー！」

嬉しさのあまりはしゃぎまくる公平。

「じゃ君、薫だっけ？ 明日から軽音部な。そんでもって、部作るた

めに勧誘な。よし、ヤル気出てきた。今から勧誘じゃー！」  
とハイテンションで音楽室を出て走ってった公平。音楽室は2人だけになった。

「ところで薫くん。」

「薫でいいよ。なに？」

「さっき何か言い掛けてなかった？後悔とかいじとか。」

薫の顔が暗くなった。そして

「いや、何でもない。」

とボソッとつぶやいた。



確かに薫が運良く入ってくれたが、あと一人となるとまた難しい。

「あのさあ。」

薫が手を挙げた。

「ポスターとか作ったらどうか？ほら、掲示板に貼ってあるやつ。」

『おーグッドアイディア』2人は声を揃えた。

「じゃあさ、みんなそれぞれポスター書いてこようぜ、派手で格好いいやつ。」

「公平。お前も書くのか？」

「当たり前だろ！待ってるよ。めちゃくちゃいいやつ書いてくるぜ。」

「というのが残念ながら公平にそういうたぐいのセンスは1ミクロもない。昔彼は図工の時間、隣の席の人の似顔絵を描くことになって、完成した似顔絵を隣の席の女子に見せその子を泣かせたことがあるのだ。」

「お前いいや。紙とインクの無駄。」

「おい。オレはピカソをも超えるぜ！」

「それはとらえ方によってはヘタクソじゃねーか。」

「そんな会話を繰り返していたら、やっと長い階段も終わり屋上の扉が見えた。そして扉に手をかけたとき」

「なんだとおく、てめえ！」

「な、なんだ？」

扉の向こうでなにかあつてるらしい。おそるおそる扉を開くと、一人の女子が男三人に囲まれていた。

「何かヤバそうだねえ。」

薫がびくびくしながら言った。

「ああ、確かにヤバイ。」

「おお、確かにあの娘可愛いさはヤバイ。」

おい、お前の頭確かにヤバイよ。公平……。そんなことを思っているよ、

「能書きはいいから、さっさとかかってこいよ！」

と女の子が叫んだ。おいおい、かかってこいよって女の子だろ。すると男の一人が殴りかかってきた。がその女の子は、それをヒュイと避けると腹部に膝蹴りをいれた。

「ぐはっ！」

男は膝から倒れた。

『マジかよ？』

三人とも言葉を失った。

倒れた仲間を見て残りの二人は

「てめえ、やったなあー！」と同時に襲ってきたが、

素早く片方の懐にもぐりこむと、顎にアッパー。そしてもう片方には、綺麗な回し蹴り。

そして公平が一言。

「あ、パンツ見えた。」

その声が聞こえたのか、女の子がこつちを見た。

「何、あんたらも仲間？」

ブンブンと首をふる三人。

「じゃ、何の用？」

「いや、僕達は昼飯食いに来ただけです。」

自然と僕の声も小さくなる。そして残り二人も大きく頷く。

「ふーん、ならいいけど。」と言うとその女の子は崩れたロングの髪を直しながら、ソファーに座った。なんで屋上にソファーがあるんだ？

すると薫が

「もしかして、鬼崎 咲さん？」

とおそろおそろ訪ねた。

「ああ、そうだけど？」

と女の子はかつたるそうに答えた。

「マジかよ。あの噂の。」

公平は呟いた。

実はこの鬼崎 咲は、入学当時から有名だった。とてつもなくワル

ということ。噂によると、族を1チーム一人で潰したとか、ヤクザ相手に喧嘩を売ったとかとにかくただものじゃない。そんな超危険人物になると薫は

「やっぱり、さっちゃんだ」と急に態度を改め、しかも慣れ慣れしく「さっちゃんだ」とよんだ。

「ああ？誰あんた？」

ああ、薫殺される。と僕は心のなかで呟いた。すると薫が

「ほら、僕だよ。薫だよ、小学校のころ一緒だった。」と訴えるように言った。

すると鬼崎咲は

「え、薫君？やだ、久しぶりー。懐かしい。」とさっきまでとキャラが完全に変わっていた。

我が学校最凶最悪と称される、鬼崎 咲。

その彼女が可愛らしい笑顔を見せながら教室で楽しそうに話している

「あのー、薫さん?」

「ん、なに公平?」

「彼女とはどういった関係でございませう?」公平、緊張で日本語おかしくなってるぞ。

「さっちゃんとは小さい時家が近所で仲良かったんだよ。でも、中学のときさっちゃんアメリカに留学しちゃって・・・」

「えっ!? 鬼崎さんって帰国子女なの?」

「うん、そうだけど。あのさ、鬼崎っていうのやめてくれない? あたし鬼崎って苗字嫌いなんだ。」

「じゃ、さっちゃんって 呼んで・・・」

次の瞬間殺気と共に何か公平の頭を何かかかすめ後ろで音がした! 振り返ると、消しゴムが壁に・・・さ、ささ、刺さってる!!

「公平くん、何か言った?」

「いえ、何も・・・ 咲様と呼ばせてもらいます。」 公平の顔が明かに怯えている。なんで消しゴムが壁に刺さるんだ!?

「あははっ。なに咲様って、面白いな公平は。」

ちようど死角で薫は気付いてないようだ。

「あははっ。ホントに公平君って面白い人だね!」

咲様、顔が笑ってない・・・

「でさあ、薫くと2人はどういう関係なわけ?」

「えーっと、薫と僕達は軽音部で一緒に・・・」

「軽音って、バンドの?」

「そうそう。でもさあ、今ベースが見つからなくて」「そうなんだよ、さっちゃん大変なんだよ。」

咲様は腕を組み

「うーん」となにやら考え始めた。そして、

「よしっ」と手を叩くと

「あたしがベースやったげる！」

『えー！えー！えー！』

「なんですとおーっ！」

公平

「マジで？」

「ホント？」

「咲様ー！愛してるー！……ぐふっ。」

返事がない、ただの屍（公平）のようだ……

「え

っ、でも咲様はベース出来るの？」

「うん。留学していた時むここの友達に誘われてギターやってたから、ベースも出来るわよ！」

確かにギターが出来る人はたいていベースも出来る。

「マジかよ！よししゃー！これでちゃんとしたバンドの形になったぜー！」

公平がいつの間にか復活していた。

「ホントだな。ギター、ベース、ドラム、キーボードやっと揃ったな。」

「でき、ヴォーカル誰がすんのよ？」

「それは、我らがハルキが」

「えーっ、マジでオレかよ！？冗談だろ。咲様が歌えばいいじゃん。」

「なんでよ、ギターなんだからさ。だいいち入ったばっかで歌わせるなんて。」

「ゴメン、僕演奏は得意だけど歌うのはちょっと。」

「じゃ、じゃあ……」

「公平は……ムリか。」

「ハア、僕がやるしかないか……」

「ちょっと、ちょっと！！」公平が突っ込んできた

「なんでオレに訪ねないわけ！？」

「えっ、じゃやってくれんの?」

「んなわけないw」

「コイツ・・・シバイタロカ!」

「分かった。僕が歌うよ。」くそ、はめられた!

そんなこんなで、僕達軽音部の活動はやっと本格的に始まった・・・

キーンコーンカーンコーン学校の終わりを告げる  
チャイムが鳴り響く。

「よし、メンバーも揃って今日から本格的な練習開始だな。公平  
！」

新メンバーの咲様の加入でやっと我が軽音部もマシになってきた。

「ああ、そうだな！」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

「なあ、一つ聞いていいか？」

「ああ、なんだ？ハルキ。」

「どこで練習するんだ？」

「・・・・・・・・・・」

「あと、よく考えたら僕ら楽器持ってないし。」

「・・・・・・・・・・なあ。」

「なんだよ。」

「オレも聞いていいか？」

「ああ？」

「どうしようか？」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

早くも廃部か？軽音部。

「と、とりあえず。」

と慌てる公平。

「先生に聞こう！」

「おお、そうだな。」

「えー、空いてる部室？ないんじゃない？」

職員室で先生から出た言葉は予想通りの厳しいものであった。

「どこも空いてないっすか？」

「うん、ダメだねえ。何？君たち、部を作りたいの？」

「ハイ、軽音部を。」

「ほほー、軽音ねえ。そういや、昔ウチにもあったなあ、軽音部。

ねえ、蔵田先生。」

教頭が微笑みながら新任の蔵ティー（蔵田ティーチャー）に訪ねた。

「あ、ハイ。そうですね。」

蔵ティーは苦笑いしながら返事を返した。

「とにかく、場所は空いてないよ。」

「そうっすかあ。」

2人落ち込んでいると、

「場所がないわけじゃないですよ。」

後ろから声がした。振り返ると、ふくよかなお腹、キラリと輝く頭。校長だ。

『マジですか、校長先生？』

2人声を揃えて聞いた。

「マジです。ほら話に出てた軽音部、昔ウチにいた。あの子達は、今屋上の倉庫になっているプレハブ小屋でやってたでしょう、蔵田先生？」

「・・・そうですね。」「ちょうどあのプレハブ小屋の中の要らない物を処分しようと思ってたんですよ。もし、君たちが整理してくれるなら、そこを部室として提供してもいいですよ。」

「マジですか!？」

「マジです!」

校長先生、アンタ身体だけじゃなくて、心もふくよかなんだな。公平とハルキはそう心の中で呟いた。

教室で4人は集まっていた。

「つつうわけで、オレらであのプレハブのなか整理する事になりました。」

と公平がいきさつを薫と咲に説明した。

「ねえ、それってあたし達いいようにつかわれてない？」

「まあまあ、さっちゃん。しょうがないよ。」

「そのとおりだ、咲様。」

「あ、そういえばさあ。」薫が言った。

「そのプレハブ幽霊が出るって噂らしいよ。」

「はははっ、そんなまさか。」

「そうそうハルキの言う通り。実際見たことねえもん。ねえ、咲さん。ま？」

咲の身体が震える。

「そ、そう・・・だよ。ゆ、幽霊な・・・なんて・・・いるわけ・・・」

「あれえ、咲ひよっとして幽霊怖いのか？」

「そ、そんなわけ・・・」

「そういえばさっちゃん、昔から怖いのが苦手だったね。」

「だから違うって！」

そのとき、公平がそっと咲の肩に手を乗せ

「うらめしや〜。」

「キヤーーーーー！」

教室に悲鳴が響いた。

「あははっ、咲様キヤードって。あはは、あはは・・・はは・・・は・・・ぐふっ」

教室に死体（公平）が倒れた。

「もうみんなして！」

「ゴメン、ゴメン。」

「よし、それじゃ早速プレハブに行こうよ。」

「ああ。」

僕達は公平を残して、屋上に向かった。

「おい、みんなオレを置いてくなよ！うらめしや〜！あ、咲様、ち

よつと待つ……蹴りは……ぐはっ」公平、お前ってヤツは……

「うわっ、眩しい！」 ハルキが言った。

4人は夕陽でオレンジに染まる屋上にきていた。

「階段を四階まで登るって本気でキツいなあ。」

「男のくせにだらしないなあ、公平は。」

「そんな、咲様。薫もキツいよな？あれ、薫は？」

「ハア、ハア、みんな……ちよつと待って。」

薫が後ろからやつと階段を登り終え、後ろからやって来た。

「大丈夫か、薫？」

「ありがと、ハルキ。大丈夫だよ。」

小柄で運動が苦手な薫には階段四階はキツいようだ。

「ハア、ハア。あ、あれがプレハブじゃない？」

薫の指の先にはボロくて不気味なプレハブが建っていた。

「屋上にプレハブっておかしいだろ。」

と公平が言った。

「まあ、そんなことどうでもいいじゃん。中入ってみようぜ。」

とハルキが校長からもらったプレハブの鍵をポケットから取り出し鍵

穴に差しこもつとしたとき、後ろから咲が

「ね、ねえ。なんかプレハブの中に人影が見えるんだけど……」

「えっ？」

3人の動きが固まった。

「ほ、ほら。」

言われてプレハブの中を見ると、確かに黒い影が。

「ぬわあ〜！〜！」

ハルキが慌てて、プレハブから離れた。

「うわっ、マジかよ！？」

「誰か先生か誰か入ってるだけじゃないの！？」

「そんなわけない！だって鍵これしかないし、ずっと校長の机の引

き出しにあつたんだから。」

「それじゃあ、本当に？」『……………』

またプレハブの中の影が動いた。

『うわーっ！』

「キヤーっ！」

「ど、どうするよ？」

「どうするっつっても。」みんながビビりまくっていると、薫が

「ぼ、僕行くよ。」

と名乗りを挙げた。

「本気か？薫。」

「うん。」

と頷くと、プレハブに近づき鍵に手をかけた。

「気を付けて、薫君。」

「頼むぞ、薫。」

またコクリと頷くと、鍵を回し、カチャという音があった。そして、

一気に扉を開けた。

「だ、誰だ！！」

と薫が叫んだ。

すると黒い影がゆっくりと振り返った……………

「誰だ！」

薫がそう言つと、黒い影はこちらを向いた。

「あ、あなたは。」

「薫君。どいて！」

薫が振り返ると、咲が走つてこっちに来ている。そして、勢いよく飛び

「トリヤー！！！」

と飛び蹴りを黒い影に放つた。

「うわっ。」

黒い影はそう言いながら、1mくらい後ろにふっとんだ。すると公平は

「咲様。幽霊相手に物理攻撃は効かない。ここは念仏だ。ナムアミダブツ！ハアツ！」

となにやら変な念仏を呟きだした。ハアツつて・・・

「そ、そうだ。幽霊は明るい所は苦手なはず。電気をつけよう。」  
ハルキはあたふたしながらも、電気をつけた。すると影の顔がはつきり見えた。

「あっ」

「えっ」

「なに」

「もうみんな！落ちついてよ。幽霊なんかじゃないよ」

「いてえーな。何すんだ、お前ら。」

と言いながら影だった人は立ち上がった。

「ほら、ただの蔵田先生だよ。」

と薫は呆れながら言った。『なぐんだ。ただの蔵田先生か。』  
みんなホツとしながら言った。

「何だじゃねえよ！なんで飛び蹴り食らわすんだよ！」

蔵テイーはぶついたららしい腰を擦りながら言った。

「いや、先生。飛び蹴りは咲様が勝手にやっただけなんで・・・」

「ちよつと、公平！あたしを見捨てるつもり!?」

「とにかく、先生相手に飛び蹴りとはな。どういづ了見してんだ！」

「ホントすいません。」

咲が慌て謝る。

「お前らもだ。」

と残りの三人を見ながら言った。

「えー、オレ念仏唱えただけだし。」

「僕は電気付けただけだし。」

「僕は初めから何も。」

と言いつ訳してると、

「連帯責任だ！」

三人はしぶしぶ

『すんません。』

と謝った。

「はあ、まったく。」

蔵テイーは腕組みをし、「お前ら何考えてんだ。」

「いや、何ってプレハブを整理しようとしたら、中に怪しい黒い影

が見えたから・・・あれ？先生」

ハルキが気付いた。

「先生は、中で何してたんですか？」

ギクツ。明らかに先生が動揺している。

「そ、それはあれだ。お前らを手伝おうと思って。」

「あ、そうですか。」

ハルキが言った。すると公平が

「いや、待てよ。ハルキが鍵もらった時、先生は職員室に居たんだ。

なら鍵は空いてないってわかんた。でも、先生は中に入っていた。

なんでつスか？」

公平の鋭い推理に先生が慌てふためいている。

「そ、それは。たまたま鍵が空いて、」

「異議あり！」

咲が反論する

「あたしがここに昨日来た時は確かに閉まってました。」  
昨日ってあの回し蹴りの。

「うう。」

もう蔵ティーの顔から汗が出ている。

「ねえ、どうしてですか？」

ハルキが言った。

「そ、それは。」

蔵ティーが後退りした。

そして、

「うおー！！！」

と叫んだ。そして、一瞬4人がひるんだ隙に全速力で逃げていった。

「あ、逃げた。」

「どうするよ？」

公平が尋ねた。

「別にもういいんじゃないの。説教は何気に回避できたし。」  
と咲が言った。

「でも、やっぱり何してたんだろ。蔵田先生。」

「そんなことより、早く整理しないと、薫。」

とハルキが急かすように言った。

「それもそうだね。」

と薫。

4人はやっとさっきのいざこざで、さらに散らかったプレハブ内を整理し始めた。

「うわっ、ホコリくせえ。」

「何これ？マネキンがある。」

「こっちはラーメン屋ののれんがあるよ。」

「・・・なんで布団があるんだ？」

次々と前軽音部の遺産<sup>ガラクタ</sup>が出てくるなか、

「おい、お宝発見したぞ！」  
と公平が叫んだ。

「どうせ、またくだらない物だろ。公平。」

「違う！ガラクタじゃねえ。楽器だよ楽器！」

「えっ？楽器？」

3人とも声をあわせて聞き返した。

「ああ、見てみるよ。」

と言う公平の手には、ソフトケースのギターが抱えられていた。

「うお、ホントかよ！」

ハルキのテンションが上がる。

「ねえ、他にも探したら楽器出てくるんじゃないかな？」

と薫が言った。

その声を合図にみんな整理などほったらかして、宝探しを始めた。

すると咲が

「ドラムあつたー！」

とドラムを見つけた。

「よっしゃーっ！」

と公平もテンションが上がった。そして、その後も探し続け、なんとベース、キーボード、アンプ×3を見つけた。

「前のヤツらとんだけ放置してんだよ。」

「まあまあ、結果オーライだな！」

「でも、音ちゃんとなるのかな？」

「試してみる？」

と言うと咲が手慣れた手つきでギターとアンプをつないだ。赤いテレキャスが眠りから覚めたように光を放っている。そして、咲がピツクをおろす。

．．．ジャーン

『おお！』

4人に感動が走る。

残りも試してみたが、全部壊れていなかった。

「あとは、弦とドラムのヘッドを代えれば大丈夫だね。」  
と薫が安心したように言った。

「ん？」

薫が段ボールを探りだした。

「どうした？薫。」

「うわー、見てよこれ。」薫が小さな紙のような物を手にとって差し出してきた。どうやら写真のようだが

「うわっ、何この人達。」

「めちゃくちゃ派手じゃねーかよ、これ。」

「完全ヘビメタね。」

写真に写っていたのは、顔にメイクをし服装は派手派手で、演奏をしている5人組だった。

「この人達って、ウチの前軽音部の人達じゃないのかな。」

「マジかよ、にしてもハンパねえな。……ん、まだ中に入ってるぞ。」

公平が段ボールの中から、一つのビデオテープを取り出した。

「なになに、『文化祭演奏』だってよ。見てようぜ。ハルキ。」

「ああ、面白そうだな。でも……。」「プレハブ整

理はどうするのよ。」

「まあ、いいじゃん。咲。」

「そうだよ、さっちゃん。見てみようよ。」

「薫君がそういうなら。」

「それじゃオレ、準備してくる。」

と言うと公平は疾風の如く走っていった。

まったく。調子いいヤツだな。

e p . 7 (後書き)

コメントお願いします！

視聴覚室。。。

そこでは公平がビデオカメラの接続に手間取っていた。

「おい、公平まだかよ。」

「そうよ、ホント遅い。」

「ねえ、まだ？公平くん。」

「うるせえ、ちよつと待つてる。この野郎。」

かれこれこのやり取りを20分以上も続けている。

「もう、どんだけ待たせてんのよ！」

「あーもう、ポップコーンでも食つとけ。」

と言うと公平はうんまい棒を皆に渡した。このやり取りもかれこれ20分以上。

「どんだけうんまい棒食わせる気だよ。」

3人のブーイングの中やつと公平が接続に成功した。

「ふうー、ボス。爆弾処理完了しました。」

「なにやりきつた顔してんだよ。とつくに爆発してるよ。」

やつとテレビに映像が映った。そこには、特設ステージの上に4人の派手な格好した前軽音部のメンバーが立っていた。そして、ドラムのカウントから演奏が始まった。

「うわっ、音割れ激しくねえか？」

公平がしかめっ面で言う。

「しょうがないよ、公平くん。ねえ、それよりもこの人達・・・」

「うん、めちやくちゃ上手い。」

ハルキは言葉を失った。確か音質は悪いがそれ以上に伝わってくるものがある。すると咲が

「特にあのギター。ハンパなく上手いわ。」

咲の言う通りギターのテクニクが群を抜いている。ハードロックでテンポが速いにも関わらず正確なコードを押さえる指さばき。

『すげえ。』

そういうしか無いほどの演奏だった、が公平が気付いた

「おい、あのギターもしかして蔵田じゃねえの？」

『えっ？』

3人はテレビに近寄った。『あーっ！確かに！』メイクで分かりづらいが、確かにそのギタリストはあの蔵ティ―だった。

「マジかよ、あの蔵田先生が・・・」

ハルキが言い掛けると、後ろのドアが勢いよく開いた。

「くそー、やっぱりか。」そこには、ちょうど蔵ティ―がいた。何やらとても悔しそうである。

すると薫が閃いたように、そうか、と言った。

公平が尋ねた

「何がそうかなんだ？」

「考えてみてよ。蔵田先生はプレハブの中で何かをしていたよね。」

『うん』

「しかも、そのプレハブは元軽音部なので、これはプレハブから見つけた。」

「あつ。」

「あつ。」

ハルキと咲は気付いたようだが

「ん？」

と公平は首を傾げてる。

「まだ分からない？これを見てて先生は悔しがったんだよ。つまり先生はあのプレハブの中で、このテープを探してたんだよ。」

「ていうことは、つまり先生はプレハブの中で、このテープを探してたんだよ。ってことか？」

「んだよって、一字一句同じじゃん。」

「でしょ、先生。」

蔵田は観念したように、ため息をついた。

「ああ、そうだよ。くそー、遂にはれたか。」

「なんでだよ、別にいいじゃん。ばれたって。」

蔵ティーは気まずそうにうつむいて言った。

「なんでって、その映像みれば分かるだろ。昔オレがどんなだったか・・・」

確かにテレビの中の映像がそれを物語ってる。

「あの頃オレはいわゆる不良だった。」 『うん、まあ。』

」

学校での蔵ティーは、いつも控え目でどちらかという生徒になめられていた。また蔵ティーが語り始めた。

「だがな、オレもいざ高3になると・・・」

蔵ティーの語りが続く。

「実はオレには好きな子がいてその子がなんと・・・」蔵ティーは止まらない。

そんな中、公平が閃いた。

「なあ、蔵田を軽音部の顧問にしねえか！」

「何言ってるんだ、公平。一体どうやって？」

「だから、このビデオをネタに脅してさ・・・」

「駄目だよ、公平くん。そんな酷いこと。」

薫が公平を止めたが、

『おー！いいじゃんそれ。』

ハルキと咲は声を揃えて言った。

「駄目だよ、みんな。だから、先生が可哀想だよ。」公平が薫の肩に手を乗せ、

「薫！よく考えてみる。このままじゃ軽音部は廃部だぞ！いいの？廃部して。」

「うーん、そういわれると・・・」

ハルキも肩に手を乗せ言った。

「薫。辛いのは分かる。それは皆同じだ。だがな、何かを得る為には、犠牲が付きものだ！」 『いや全然格好ついてないよ。ハルキくん・・・』

「おい、聞いているのか？」蔵ティーが

聞いてない事にやっと気付いた。

「よし、作戦開始だ」公平がニヤリと笑って言った。

「先生、軽音部の顧問になってくれよ。」 「ちよつ、ち

よつとおい！どうして俺が顧問にならなきゃいけないんだ！！」

蔵ティーが軽くパニック状態のように、驚きながら言った。

「第一俺は、マンガ研究会の顧問なんだ。」

「マンガ研究会って……」

咲があきれたように言った。

「しょうがないだろ！俺はまだ下っぱなんだから、しかも……」

蔵ティーはまたうつむいてまた語り始めた。「俺は今の校長に色々

世話になったんだよ。」

暗い雰囲気の中、公平が一声

「うん、そういうのは別にいいからさあ、顧問になってくれよ。こ

れ（ビデオ）ばらされなくなかったら。」公平お前今ものすごく怖

いぞ。

その言葉に蔵ティーは

「なんだとおおーっ！」と叫んだ。

「だから、顧問になって下さい。先生。お願いします。」

「お願いしますって……断れないだろがぁーっ！」と言って蔵テ

イーは膝から崩れ落ちた。

こうして我ら軽音部は、顧問をゲットした。

e p . 8 ( 後書き )

コメントをお願いします

6月半ば。春が去りつつ夏が顔を出しつつある。そんな

「よっしゃーっ！ついに倉庫整理終わったぞー。」

「ダメだ、オレもう死にそう。」

「アンタは勝手に死んでなよ。」

「咲様ひどい！」

「まあまあ二人とも。」

この一週間倉庫内の荷物を運んだりゴミ処理ばかりで肉体的に疲れきっていた。

「気付いたんだけど、軽音部での最初の活動が倉庫整理ってなんかヤダね。」

薫が額に汗を光らせはにかみながら言った。

「オレなんかもう焼却炉に愛着わいたぜ。なんか今のオレならなんでも跡形もなく燃やしきれる自信がある。」

「いや、そんな自信いらねえよ公平。にしてもこれでやっと本格的に練習できるな。」

ハルキが喜びを噛みしめるように言った。振り返ってみれば入学式から約2ヶ月。ろくに練習していなかった。これでようやく練習出来る。4人は思っていたが、そう簡単に事は運ばなかった。

「おっ！終わったみたいだな。」

振り返ると蔵ティーが立っていた。

「先生これでやっと練習開始できますよ。」

「何か忘れてないか!？」 『えっ!?!何を?』

4人はキョトンとした。

「中間テストだ！」

3人（ハルキ、公平、咲）は固まった、そして数秒後『うそー！ーん！ーん！』

と叫びながら気絶した。

「という訳でテスト一週間前だから部活は休みだ。」

「あ、はい。」

薫は先が思いやられると返事した。

放課後4人は部室<sup>プレムナ</sup>に集合していた。

「みんな勉強大丈夫？」

薫が不安そうに尋ねた。

「あたしは英語はいけるけど、日本史がちょっと……」  
咲が頭を掻きながら言った。

「僕は英語と数学が……」

ハルキは苦笑いしながら

「オレは記号問題以外が……」

「公平くん、それはほぼダメっていうこと……」

「ザッツ ライト！」

グッドと手で表しながら公平はとびっきりの笑顔で答えた。

「公平、そんな笑ってる場合じゃないぞ。」

ハルキは公平の頭脳を知っていた。確かに何故か記号問題は百発百中だった。無駄に強運なのだ彼は。

「うわーん、薫先生。助けてー！哀れなこのオレをどうか。」

薫は学生でも上位のほうで中学生時代平均95点という秀才なのだ。

「うーん、出来る限りのことはするけど3人をいつきに見るのはちよつと限界が……」

するとハルキが

「蔵ティー教えてくれないかな？」

と言い出した。

「あー、それいいかも。」咲が言った。

「でも蔵田先生教えてくれるかな？」

「いや、良い考えがありませんぜ。皆々様。」

公平がニヤリと笑った。

ああ、蔵ティーご愁傷様。

「何でテスト前で忙しい中、俺がお前らに勉強を教えなきゃいけないんだ！」

蔵ティーが文句を言いながらプレハブにいた。

「いや、教えなくてもいいんっスよ先生。ただね、うっかりあのビデオをみんなに見せてしまう・・・」

「あーもう、分かった分かった。教えりゃいいんだろ教えりゃ！」  
「さすが先生。」

公平は蔵ティーに対してホントSだなと3人は思った。

「さて、俺は何を教えればいいんだ？」

「先生は公平くんを・・・」

「えっ！？コイツをか？」公平は先生を見た。

「ああ、わ・わかった。」ホントご愁傷様先生。

数時間後。。。

「ふう〜。」

「あゝ、疲れたわ〜。」

薫のノート&解説でだいぶ勉強がはかどった。が

「だから、なんでわかんないんだ！ここは因数分解して、Xは2以上だから・・・」

「先生、世の中因数分解だけじゃダメだぜ。やっぱり分解とかしたりして逃げずに、ちゃんと向き合わなきゃ！！ここは三人称単数だろ！」

「なんで数学に三人称単数が出てくんだよ！だから因数分解して・・・」

「分かった、サ行変格活用だ。」

「ちがーうー！！！」

あつちはそう簡単にはいかないようだ。

「公平くんは強敵だね。」薫も思わず苦笑い。

「もうダメだ、休もう。」蔵ティーも堪らず放棄。

みんな一斉に机にうつぶせになった。すると咲が蔵ティーに尋ねた  
「先生つて軽音部だったんだよね？」

「・・・ああ、まあな。」

「先生の昔話聞きたい。」

「ああ、それめっちゃききたい。」

「オレも」

「ぼくも」

4人は一斉に蔵ティーに期待の眼差しを向けた。「うーん、あんまり話したくないんだけど」

ともつたいぶつていると公平がすかさず

「いいじゃん、いつつも無駄に語ってんだろ。」

「なんだその言い方は！俺がいつもみんなに話しを無理矢理聞かせてるみたいない草は・・・」

「とにかく話せよ。」

「そうですよ、先生。先生の話聞きたいです。ハルキが必死で先生の機嫌を直した。」

「まあ、そこまで言うなら・・・」

と蔵ティーは語り始めた・・・

e p . 9 ( 後 書 き )

蔵  
テ  
ィ  
ー  
編  
に  
次  
回  
か  
ら  
入  
り  
ま  
す  
。

## ep.10 (前書き)

最近忙しかったのですが、やっと更新できました。

七年前・・・

今日も屋上のプレハブで、軽音部が演奏していた。

「ジャジャァー！」

「ふう、結構いいんじゃないね」ギターを持った男が言った、若いころの蔵田だ。

「何言つてんだ、まだまだじゃねえか。特にお前、コード間違いやがつて、いつたいいいつになつたら・・・」ドラムに座つてガミガミ言つているのは、部長の山木

「まあまあ、まだ文化祭まで時間はあるし。いいじゃん。」

と山木をなだめてるのは三橋（Vo）。

「三橋、お前まで。おいつ、大石もなんとか言つて・・・て、うおい！！！」

と、ベースの大石は寝ている。

「なんでお前は、立つたまま寝れんだよっ！！！」

「まつ、山木先輩。そんなカリカリしないで。」

「もとはと言えば原因お前だろがー！！！」

と山木の拳が蔵田の腹にジャストミート。蔵田は力尽きた。

「あーあ、またか。」

「zzzzzz」

山木は倒れた蔵田を抱えてプレハブの外に放り投げた。そして

「完璧に弾けるようになるまで、ここに来んな！！！」と怒鳴つて戸を閉めた。

「くそ、山木先輩。なんてことしやがる。山木のハゲ野郎！！！」

と蔵田が叫んだ瞬間、戸が開き

「ハゲじゃねえ、スキンヘッドだバカ野郎！！！」

とドラムスティックが矢のように飛んできた。グサツその矢は壁にスティックめり込んだ。

「は、はい。スミマセン。」と蔵田はその場から、そそくさと逃げた。

「ちくしょう。山木先輩厳し過ぎだろ。・・・あ、くそ、また間違えちまった。」

蔵田は体育館の裏で一人寂しく練習していた。かれこれもう二時間は、同じところを間違い続けている。

だいぶ空が夕暮れてきた時

「おいっ、お前！ここで何してんだ！！」

と声をかけられた。

ふと顔を見上げると、4・5人のいかにも不良という格好をした人達がいた。

「あ、あゝ？なんだてめえら。」

と蔵田が軽くドスをきかせ返事をする

「てめえらとは何だ、てめえ！！」

と一気に修羅場が変わった。そして、その不良達が襲いかかってきた。・・・が

「こちとら忙しいんじゃー、このカスども！」

と4・5人を瞬殺。一気にその場が地獄絵図に。

「お前、何者なんだよ。」

と不良の1人が言った。

「あ、あゝ？蔵田だよ。」

すると、とたんに不良の顔が青ざめた。

「あの、蔵田か。中学時代に不良高校5・6校相手に喧嘩して勝ったっていう。」

そう、蔵田は自ら言っていたが不良（相当）だった。

「あん時は、あれだよ。家の前を族が走ってたから、片っ端からな。」

「くそー、なんて奴を相手にしちゃったんだ。」

不良はガクリと頭を下げた。

「ところで、お前からこんな所で何するつもりだったんだよ。ここは別に不良のたまり場じゃねえだろ。」

ギクツと不良の体がゆれた。

「おい、何でだよ。なあ？」

「・・・告白だよ。」

と恥ずかしそうに不良の1人が言った。

「告白だあー？何でその告白の場に4・5人もいるんだよ。」

「そ、それは、1人じゃ不安だから・・・」

蔵田は腹を抱えて笑った。

「1人じゃ不安って、女子かよお前ら。ハハハツ。で、いつ来るんだよ、その子は。」

「・・・もう一時間前。」

「ハア！？ふられたのかよ？つたく、どんだけ面白いんだよ。」

「くそー、覚えてるよ！」

と不良たちは泣きながら、去っていった。

「ちよい言い過ぎだったかな？おっと、もうこんな時間か今日は帰るか。」

とギターをケースに入れると蔵田は帰る準備をし始めた。すると

「遅くなってごめんなさい。ちよっと道に迷っちゃって。」

と息に切らせた女子が現れた。

「ん、なんだお前。」

「あの告白のことなんですけど、えーっと、あの、その、お互いのことよく知らないし、だから、その・・・」

「おい、ちよっと待て。お前勘違いしてねえか？お前に告白しようとした奴なら」

と蔵田が言い掛けたが

「あ、でも落ち込まないで。きっと私よりも良い人が・・・」

とまったく話を聞いてない。それから5分後

「だから、付き合えません。ごめんなさい。って、あれ蔵田君？」

とやっとその子が人違いだと気が付いた。

「やっと気づいたか。ずっと1人でぺちやくちやしやべりやがって人の話聞きゃしねえ。」

「あ、ゴメン。遅刻しちゃったから慌てて。」

「そっぴいやお前道に迷ったって。」

「そっぴなの。体育館まで行くのに30分もかっっちゃって。」

「ってどっぴだけ方向オンチなんだよ。」

「いっぴ、学校じっぴ方位磁石意味なくてさ。」

「いっぴ、絶対いらねえだろ方位磁石。」

「あはは、そっぴだね。そっぴか、もう帰っっちゃったかー。じっぴ、私も帰ろかな。……ん？」

蔵田が持つているギターに気付いたようだ。

「え！蔵田君もギターやるの？」

女の子が目を輝かせて言った。

「蔵田君もっぴて、えーっぴと……名前なんだっぴけ。」 「えー、酷

い。江崎ナナだよ。ナナ！」

「そっぴそっぴナナもやるのか？ギター。」

するとナナは腕組みをし、自慢気に

「まあねー！！」

と微笑みながらいった。

「へえ、じっぴ弾いてみるよ。」

と蔵田はギターを手渡した。それを受け取ると、ナナはストラップを掛け、ピックを握った。

「おお。」

蔵田はナナのギター姿に少し、気迫を感じた。

そして、ナナがピックを振り上げた！！……が

「あ、これ左利き用じっぴゃん。これじっぴゃ、弾けないよ。」

とそそくさと、ギターを外し蔵田に返した。

「なんだよ。せっぴかくギター弾けるっぴーから。」

「だって、しょうがないよ。あたし右利きだもん。それじゃ。あたし帰るね。」と言うとナナは手を振り別れを告げた。

「おう。またな。」

と言うと蔵田も手を振りかえした。

「そういえばあいつ。オレにびびんなかったな。」

と蔵田は1人呟いた。

そんな、想いふけっていると、

「あ、あの〜。」

振り返ってみると、そこにはナナが立っていた。

「どうした。忘れもんか？」と蔵田がきくと、ナナがきまわずそこに

「校門でどっちだっけ？」

と舌を出しながら訪ねてきた。

「・・・お前・・・本気で言ってるのか？」

と蔵田があきれながらきいてみると、コクリとナナの頭が下がった。

「お前は・・・どんだけ方向オンチやねん!!!」

蔵田は思わず関西弁でっ込んだ。

次の日・・・

蔵田は、放課後また体育館裏に練習しに来ていた。

そう、また山本から追い出されたのだ。

部室、、、

「おい蔵田。お前昨日ちゃんと練習してきたのか？」山本が腕組みをし、眉間にシワを寄せている。

「あのつすね、先輩。実は、最初の方は練習してたんですけど・・・

」  
「けどなんだ？」

問いただす山本の気迫に、蔵田はなかなか昨日ケンカしていて、ろくに練習が出来てないことをいいだせなかった。

「あのですね。」

「だから、なんだ？」

（こうなったら一か八かだ。）

「実は昨日、練習していたら目の前になんとツチノコが現れて、これは捕まえなきゃと思って追いかけたわけですよ。そして、追いかけていたら道の途中に沼があつて、そこになんと河童がいて、これはキュウリあげなきゃと思ってスーパーに買い物しに行ったら財布を忘れていてそれで・・・」

蔵田は精一杯の嘘をついた。がそれは逆効果でかえって山本を怒らせるスイッチになってしまった。

「蔵田・・・てめえ。みえみえの嘘をつくんじゃねえ！だいたいツチノコ？河童？どんだけ不思議体験してんだよ！しかもここら辺に沼なんかねえよ。あるのは川だ！」

「あ、じゃあ河童は川に居て・・・」

「じゃあ、てなんだよ！やり直し効くわけねえだろ！・・・出直し

てこい。」

山本が手を振りシツシツと追い払う素振りを見せた。

「わかりました。もっとリアリティーのある話考えてきます。」

「バカ野郎。ギターの実習やりやがれ！」

ついに山本のスティックが飛んだ。これまた蔵田の髪をかすめ、今度は鉄の入りの扉に刺さった。

「次は外さねえ。」

というとき、山本はスティックケースからまた新たにスティックを取りだし始めた。

その刹那。蔵田は疾風のごとくその場から消えた。

「何で、鉄に木の棒が刺さるんだよ。怪物か？あのハゲぼうず。」

結局また一人で練習するはめになった蔵田は愚痴をいいながら、ギターを弾いていた。

何度も何度も練習するが、いつものようにミスってしまう。

「あー、全然上手くないかねえ。」

蔵田がギターのコードと格闘していると、

「ナナしゃんじょう！！噛んじゃった……。」

声に反応し振り返ると、ナナが立っていた。その手にはソフトケースに入っているギターがあった。

「あーもう、せっかくかつこ良く登場しようと思ってたのに、台無しだよ。」

ナナは悔しげに蔵田に近寄り、ギターをケースから取り出し始めた。その意外な行動に蔵田は、固まっていた。

「お前こんなトコで何してんだ？まさか、ギター弾きにわざわざ？蔵田がたまらずたずねた。するとナナがしかめっ面で

「あー、わざわざって。せっかく私のギターを見せたげようと思ったのに。」

とストラップを肩にかけながら言った。

その姿は、やっぱり何か気迫を感じる。

「じゃ、いくよ。」

ナナが振り上げたピックをおろした。

「ギューーン」

ナナの顔つきが変わった。ナナの左手が正確なコードの位置を押さえ、右手は素早いストローク。

そのテクニクは凄まじかった。

「・・・すげえ。」

蔵田は目の前の出来事に、ただただ呆然としていた。いつものナナとはまったく。

「ふう。どうだー！」

ナナは弾き終えてスッキリした表情。

蔵田は

「すげえ。・・・マジすげえよ、ナナ。お前ギター上手すぎる！  
！いつからやってんの？」

と興奮気味に言った。

「六歳からお父さんに教えてもらっててね。」

少し照れくさそうにナナは答えた。

「あ、そうだ。」

蔵田はいきなり何か思いついたようにさげんだ。

「それだけ上手いんならオレにギター教えてくれよ。」

「え！私が蔵田君に！？うーん、どうかなあんまり人に教えたことないし。」

ナナは蔵田の急な提案に動揺している。

「大丈夫だ。心配すんな。なあ、お願いだ。この通り。」

必死でお願いする蔵田に、ナナは

「わかった。私でよければ。」

とやっとな承諾してくれた。

「ホントか？よっしゃー！」ガッツポーズをし歓喜する蔵田は

「それじゃ、早速今から教えてくれよ。」

「うん、良いよ。」

こうして蔵田とナナのマンツーマンギターレッスンが始まった。  
3日後。。。

「うん、もう完璧だね。」

ナナが蔵田のギターの演奏を聴いて言った。

「うわー、マジありがと。この3日でめっちゃくちゃ成長したぜ。」

「

蔵田はナナのおかげでギターの腕がここ3日とてつもなく成長した。

「これでやっと部室に入れるぜ。見てろよ、あのハゲぼうず。」

蔵田はとつも嬉しそうに言った。

「ホントにありがとな。ナナ。」

「いいってことよ。これ位朝飯前よ。」

「よし、じゃ早速部室行ってくるわ。」

「うん、頑張ってるね！」

蔵田は勢いよく山本の元へ走っていった。

・

「あ、蔵田くん!!」

数日後、廊下で2人は出会った。

「おう、ナナじゃん!!」

「あの後結局どうだった？」

「それがさあ・・・」

蔵田はにやけながら

「あの後ハゲぼうずにギター見せたら、『お、お前この数日何があったんだ。』ってめちゃくちゃ驚いてた。マジスカッとしたよ。」

と嬉しそうに言った。

「やったね。」

ナナも飛び跳ねながら喜んでいる。

「いやー、お前のおかげだよ。ナナが教えてくんなきゃどうなったことか。」

「いやいや、蔵田君が頑張ったからだよ。元々素質あったから、私は少しかアドバイスしただけだし。」 「いやいや、そんなこと

ねえよ。」

「いやいや。」

「いやいや。」二人はここ数日ですっかり仲良くなっていた。そんな二人を物影から見ている人物がいた・・・

季節は秋となり、いよいよ文化祭の時期が近づいてきた。それに伴って学校全体に文化祭独特の雰囲気 が漂っていた。

軽音部の面々も本番が近づいてるだけに、練習にも気合いが入る。

「ジャジャァー!!」

「今のめっちゃ良くなかったですか?」

蔵田が興奮気味に言った。山本も

「ああ、確かにさっきのは上手くいったな。」

三木も大きく頷いた。

「おい、大石はどう思う?」山本が尋ねると

「.....zzzz」

「って寝てるのかよ!!!」山本と蔵田がハモッて突っ込んだ。すると三木が言った。

「たぶん大石も満足してるよ。だって演奏中起きてたもん。」

その発言にまた2人は

「って演奏中寝てるのかよ!!!」

とまた2人仲良く突っ込んだ。

「おーっと、もうこんな時間か。」

山本が時計を見て言った。

「今日はこのくらいにしとくか。クラスの出し物の手伝いしなきゃなんねえし。」

「そういえば、先輩達のクラス何するんですか?」

と蔵田は片付けている山本達に尋ねた。

「オレのクラスは、お化け屋敷だ。」

三木が答えた。

「あ、オレんとこも。」

と山本も答えた。

「えっ!俺らのクラスもお化け屋敷っすよ。じゃ、大石先輩は?」

すると大石はコクリと頷いた。

「えー、みんなカブリじゃないっすか。つーか、こんなアリなんすか？」

と蔵田はブーブー言った。

「いや、毎年こんなんだよ。おかげでウチの学校お化け屋敷のクオリティハンパないから。」  
と三木が自慢気に言った。

「いや、お化け屋敷のクオリティが自慢な学校ってなんすか!？」  
蔵田は冷静に突っ込んだ。すると山本が立ち上がり、

「じゃ、オレらもうあがるけどお前練習頑張れよ。」と蔵田に告げた。

「あ、はい。」

「可愛い彼女によろしく。」と三木が言うと

「いや、彼女じゃなくてただの友達っすよ!茶化さないで下さい。」  
顔を真っ赤にして蔵田が反論した。

「ちょっと大石先輩からもなんか言っして下さいよ。」  
「……」  
「ッ。」

「なにさりげなくニヤリとしたんですか!先輩。」

「とにかく、青春しろよ。」三木達はからかいまくってプレハブを後にした。

「あー、なんか疲れた。さあ、練習するか。」  
するとプレハブの戸が勢いよく開いた。

「なな華麗にさんじよふ……何でいつも噛むだろ。」  
とナナがギターを抱えやってきた。

そう、あれから仲良くなった2人はその後もギターのレッスンを続けていたのだった。

「おう、来たか。今日も頼むぞ。」

「うん、まかしんしゃい。」  
「今日もあの練習か。本当に出来んのか?オレに。」  
「そのはずだよ。だって蔵田君って……」

そんな2人のやりとりをこっそりとプレハブの外から見てる人影が

いた。

「くそー、アイツら。いつの間に。俺を差し置いて。」

そう、あのナナを待っていて蔵田にケチヨンケチヨンにやられた、不良である。

「この恨み。絶対はらしてやる。」

その顔には、不気味な笑みが浮かんでいた・・・

本番前日。。。

この日軽音部はリハーサルを終え、各々出し物の方へと回っていた。蔵田は切った段ボール等のゴミを焼却炉へと運んでいた。

「何でオレが雑用なんか。それにしても今日のリハ完璧だったなあ。オレらのバンドが一番だったし。」  
そんな独り言を言いながら歩いていると、いきなり頭に衝撃が走った。

「っ痛〜。」

ふと頭を触るとヌルツとした液体、そう血が流れていた。

「ふふっ、ざまあみる。」

声の方を振り返ると、あの時の不良達がいた。今度は木の棒を持っている。

「なんだてめえら！調子乗ってんじゃねえぞ！！」

と頭を押さえながら、蔵田が吠えた。

「そりゃこっちのセリフだ。オレの憧れの江崎さんをとりにやがって！」

と不良達が襲ってきた。

「どいつもこいつも勘違いばかりしやがって。」

と蔵田が襲ってくる不良の1人をひらりと避け腹を蹴り上げた。が相手が多い上頭をケガしてるので、囲まれタコ殴り状態になってしまった。

「くっそ。もう頭きた。」

蔵田はうずくまっていたが、砂を掴み不良達の目にかけた。

「うわ、目が！」

その隙に蔵田は怒涛の如く一気に不良達の腹に一発ずつ右ストレートをお見舞いした。

「ぐふっ。」

不良達はその場に苦しそうにうずくまっていた。

「ふうー、やっとおわ・・・た・・・ちよつとやべえかも。」

倒した蔵田だが頭の流血のせいで、めまいがしていた。

「こりゃゴミ捨てどころじゃねえな。」

と言い残して蔵田は気絶してしまった。

蔵田は目を覚ました。

するとそこには軽音部の3人とナナがいた。

「おお、目覚ましたか。」

山本が蔵田の顔を覗きこんだ。

「ここは・・・保健室？そうか、あの後気い失って。」

そう言っただけで何気なく殴られた頭を触ろうとの右手で、あたまたに触れた瞬間、激痛が蔵田の右手に走った。

「ツ痛!!!」

ふと右手をみると、腫れ上りおり包帯で巻かれていた。その光景に蔵田は固まった。そう右手が腫れているということはギターのコードを押さえられない。つまりギターが弾けないことを意味していた。

「先輩・・・オレ・・・」

「ああ、わかつてる。・・・別にお前を責めるつもりはねえよ。不良に襲われたんだってな。聞いたよ。今回は運が悪かったただけだ。」

「でも、本番は!」

「・・・辞退するしか。」

と山本が言い掛けた時

「ちよつと待ったー!!!」ナナがストップをかけた。まわりの4人は、何事かとナナに注目した。

「まだ諦めるには早いよ。蔵田くん。左でピック持てる?」

「ああ、ピック持つくらいなら。」

と蔵田は答えた。

「それじゃあ、今こそ秘密の特訓の成果を見せる時だよ。」

ナナの思わぬ発言にあたりは驚きを隠せない。蔵田を除いて。

思わず三木が

「なに?その秘密の特訓って。」

と尋ねた。

「いや、オレホントは左利きなんすよ。でもギターが右利き用じゃなくて、ギターのときは利き手じゃないほうでやってたんですよ。で、ナナに『利き手でやれば』って言われて最近左利き用で練習してたんですよ。」  
と蔵田が説明した。

「でも、今まで簡単な基礎練習しかやってないだろ。明日までに出るか。」

不安を隠せない蔵田に、

「できる！絶対できるよ！あたしを信じて。」  
とナナが言った。

「正直、本番でやるとするならもうそれしか方法がない。一か八かやってろ。オレもお前なら出来る気がする。」

「オレも。」

「・・・コクリ」山本に続き他の2人も賛成のようだ。

蔵田はみんなの顔を見回し、そして

「よっしゃー、いっちょやりますか。」

蔵田は立ち上がった。

「そうと決れば、早速練習だ。」

蔵田は急いでナナのギターで練習した。その顔ツキは真剣そのもの。そして、その日のうちになんと完全に弾けるようになってしまった。

「すげえ、ホントにできちゃった。」

蔵田自身一番驚いている。

「あたしは、信じてたよ。だって練習もちゃんとやってたし、もともと素質あるから蔵田くんなら出来ても不思議じゃないよ。」

とナナだけは自慢気にしていた。

「で？本番どうなったの？先生。」

「ん？そりゃ、練習のおかげで成功したさ。あの時の感覚は今でも忘れてねえよ。」

と蔵ティーが自慢気に語った。

「つつかよー。先生。話長いよ。」

「なんだよ、それお前らが聞きたいって言うから話したのに。」

「いや、もう校長よりなげえーよ。こちらら因数分解とサ行変格で忙しいのに。」

『あつ！』

ハルキ、薫、咲の3人は時計を見た。針はもう8時を差している。

『うわー、もうこんな時間!!』

3人は話に夢中で途中からまったくテスト勉強していなかった。

「先生。話長いよ！」

「あたしの時間かえせ！」

「うっかりしてた。」

3人の発言に蔵ティーは

「だからなんでオレのせいなんだよ！もう知らね！」とスネて帰ってしまった。

「あーあ、帰っちゃったよ。どうする？」

ハルキが尋ねた。

「もう遅いし帰ろ。」

と薫にみんな頷き、帰ることにした。

「あーあ、蔵ティーの話でほぼ勉強潰れた。」

というハルキに公平は

「オレはちゃんと勉強してたぜ。おかげで結構進んだ」と言った。

「えっ、お前聞いてなかったの？」

「いや、聞いてたさ。聞きながらやってた。」

「2つ同時にか？」

「ああ、オレ良くテレビとかゲームしながら勉強やってっから慣れてんだ。凄いだろ！」

「……だからお前成績悪いんじゃないね？」

「……」

「・・・な？」

「・・・だな。」

結局は公平もはかどらなかつたのだろうと、ハルキは思った。

e p . 1 3 ( 後 書 き )

やっと、過去編終わりです。少し飽き飽きだったかもしれませんが、  
ごめんなさい。

あと、部長の名前が変わって  
しまっているというミスがありました。山本のほうが正しいほうで  
す。ほんとすみません。

## 番外編〜楽器店にて〜

ハルキと公平は楽器店に来ていた。それは何故かというところ・・・

「うおー、テストやつと終わったー!!」

最後のテストが終わり、ハルキがくたびれていると、

「ハルキー！プレハブ行こうぜー!!」

と元気良く公平が声を掛けてきた。

「いや、マジ今日は勘弁。疲れまくって・・・」

「だあー!!!!うっさいんじゃボケ!!おいどんはドラムを叩きたいんです。薫と咲様誘っても断られ、お前まで断ったら拙者ただのロンリードラマーやないかい!!泣くぞ。また人目も気にせず泣くぞ、コラア!!!!」

そんな興奮し言葉がおかしな公平の勢いにハルキは仕方なく

「あーもう、わかったから。行くから興奮すんな。」 「オオー、

センキュー ベリー マッチ！アイム ファイン エンドユー？」

「いやなにが」あなたはどうですか？」だよ。わかったから落ち着け。」

そんなこんなでプレハブに行きさっそくドラムを叩こうとスティックをハイハット（シンバル）に当てた瞬間「

バキッ！」

「!?!」

スティックが折れた。

「なに折ってんだよ!!」

「いや、ただ軽く叩いただけだつて。こんなかんじに。」

と言ってもう片方のスティックを振りおろすと

バキッ!!」

「!?!?!」

もう片方も折れた。

『・・・・・・・・』

しばらくの沈黙の後、ハルキがあっ、と思い出した。

「そついや蔵ティーの昔話で山本さんがスティック投げたって言うてたな。」ハルキの言葉に

「だよな？オレじゃないよな？よかったー、マジ焦ったー！」

と公平がほつと胸を撫で下ろした。

「でも、どうすんだ？確か整理した段ボールの中に大量にスティックがあつたけどそれ使うか？」

「おー、ナイスハルキ。きつと折れた時用のだ。」

とさつそくその段ボールを探し見つけ、中のスティックで叩いたみた。・・・が、バキッ！

『・・・・・・・・』

重い空気のなか公平が口を開いた。

「これ、折れる直前のスティックじゃね？」

「ああ、たぶん。つてかどんだだけだよ。折れる直前を見分けるつて。」

『・・・・・・・・』

やはり沈黙。

「スティック買わなきゃな。」

公平が言った。

「スティックつて高いのか？」

「いや、たぶんそんなにないと思う。」

「じゃ、今から行くか。」

「おう、行つてらっしゃい。」

「お前もだよ、ハルキ。」

「えー、なんでオレも。」

「人目も気にせず泣く・・・」

「あーもう、わかった！！行くから。」

ということとで楽器店に来たわけだ。

「ほおー、スゴいな。ギターとかたくさんあるな。」 「ああ、だる？よく来てたんだ。練習しに。」

「はーん。どつりでさつきから店員の視線が痛い訳だ。」  
「そんなことよりほら、スティックあつたぞ。」  
「ようやく広い店内からスティック売り場をみつけた。」

「いろんな種類があるな。どれにするんだ公平。」  
「うーん、わかんね。聞いてみるか。すんませーん。」

と公平が店員を呼んだ。すると店員が信じられないという顔をした。「！？信じられない。ただ何も買わずひたすら展示品の電子ドラムを試打していた君がやっと、やっと。」と店員が嬉しそうにして、スティックの説明をし始めた。

なかなか終わりそうにない説明にしぶれを切らしたハルキは展示してあるギターを見ることにした。

「へえー、たくさんあるな。」

店には壁一面にいろんな種類のギターが掛けてあつた。

「うお！！30万？高けえな。」

そんな山のようにあるギターの中からハルキの一際目を引く一つのギターがあつた。

「カッコいい・・・」

それは赤色のレスポールだった。ハルキにはそのギターが輝いて見えた。

ハルキが見惚れているとスティックを買い終えた公平がやってきた。

「おーい、何してんの？」

「ん？ああ、このギターがね。」

「おー、カッコいいな。えーっと、10万かあ。ビミョーに高いな。」

確かに10万はそう簡単にポンってだせる金額ではなかった。だがハルキはギターの前を離れることができない。そんなハルキのもとにある女の店員がやってきた。

「なにかお困りでしか？・・・カンジャッタ」

「あ、いや。この赤のレスポールのギターがちょっと。」

「このギター？へえー、君お目がでかい！」

「それを言うなら高いだろ。」

「そう高い！このギターはね、とても良い品物よ。」と言ってその女の店員はギターを手に取りアンプに繋ぎ、ポケットからピックを取り出した。そして、

「ギューーン」

その女の人は凄まじいテクニクでギターを弾きだした。

二人は言葉を失っていた。正確な指の動き。一切無駄な動きがない。

「ふうー。ね？良いギターでしょ？」

そう言つてギターをハルキに差し出した。

「弾いてみなよ。」ハルキはそのギターを手に取り、膝に乗せ、ピックを受けとつてその手を振りおろした。

「ジャララーン」

身体が震え、心が揺れた。そして鳥肌がだった。

「やっぱり・・・カッコいい・・・」

ハルキはますますこの真つ赤なレスポールに心惹かれた。そして

「オレ・・・買うわ。」

ついに買う決断を下した。

「おー、ついに買うか。ハルキ。」

「うん、正しい判断だよ。お買い上げありがとうございます。」

「あの一、でも10万も今は持つてないんで。少し値段を・・・」

「おー？値切りに来たか。客人よ。懐かしいな私もよく値切つてた。」

「

女の店員は昔を思い出すように言った。

「でも私バイトだから。ちょっと待つてて。店長呼んでくる。」

そう言つて店の奥に行き、1人の男を連れてきた。

なんと店長と連れてこられたのは、あの説明をしてくれた店員だった。

「おー、また君達か？今日は凄いな。いつも買わないのに今日だけ

は。で値切りたいんだって？」

機嫌が良いのかよく喋る喋る。

「あ、はい。」

「じゃあ、8万でどう？」

「えっ？2万も!？」

ハルキはイツキに値段が下がり驚いていたが、横の2人は

「8万はまだ高めよ。もっと下げてくれよ。」

「そうですね、店長。まだ下げなきゃ。」

何故か女店員まで値切っている。

「なんでバイトちゃんまで。じゃあ7万でどうだ!」最初より3万も下がった。だが

『まだまだー!!--!!--!』

「じゃ、6万8千!!--!」

『まだいけるよ!』

次第に店長の顔色が悪くなっていく。それに引き換え二人は楽しそうだ。

「6万5千!!--!」

『まだまだだね。』

「もう勘弁してくれよ。」『いいとこ見せるよ、店長さーん。』

そして汗だくの店長はついに

「もう5万で・・・ご勘弁を・・・」

ついに半額までに

「もういいです!!--!!--!」

たまらずハルキが止めた。『えー、これからののに』公平と女店員はまだ値切るつもりだったらしい。っていうか店員が値切るって。

「それじゃ、明日お金持ってくるんで。とっておいてください。」

「店長。明日になって5万は無しとか無しですよ。」「・・・うん。」

明らかに店長は弱りきっていた。

(ありがとう

店長さん。犠牲はムダにしません。)

と密かにハルキは誓った。

「良い買い物したなー。」

「ああ、ほんとに。」

「店長げっそりしてたぞ。」

「それはお前と店員さんが値切るから。」

「そっぴや変な店員だったな。」

と2人は店を後にした。

翌日、ハルキはギターを引き取りに行った。

「あれ？店長さんは。」

ハルキが別の店員に尋ねるとかえって来た言葉は

「あー、店長なら寝込んだらしくて。なんでもそっぴや追いつめられたらしくて。」

「あ、そうですか。」

ハルキはギターを受けとつたと同時に再び誓った。

こうして新しい真つ赤なレスポールを手にしたハルキだった。

番外編〜楽器店にて〜（後書き）

感想や評価、アドバイスとかして頂いたら嬉しいです。

epi 4 (前書き)

間が空いてしまってホントすいません。  
うぞ。

短いですがど

梅雨が明け、乾いた風が夏の訪れをつける。

ハルキ達軽音部のメンバーはテストが終わり、やっと練習が始まった。

「今思えばさあー、軽音部作って3ヶ月ほぼ楽器弾いてなかったんだよな。」

ハルキがギターのチューニングをしながらふと呟いた。

「そうだよな。念願の練習が〜！」

公平が体をウズウズさせながら手首を回している。

「ま、あたしは家でベース弾いてたけど。・・・おかげで成績ヤバイ・・・はあ。」

どうやら咲は相当テストのできが悪かったようだ。

「ねえ、ところであ。」

薫はある重大な事に気付いた。

「何の曲やるの？」

三人はハツと顔を見合せた。そうだ、まだ肝心な事を決めてなかったのだ。

「じゃあさ邦楽？洋楽？」

「ロックってったら洋楽よね？」

「オレさだまさしがいい。」

「僕は何でもいいよ。」

「グリーンデイとかグッドシャーロットとかオフスプリングスとかオレやりたい。」「それもいいけどボンジョビがあたしはいいな。」

「僕はビートルズ。」

「だからさだまさしだつて。それか井上陽水。」

「あー、ボンジョビとかビートルズねえ。うーん、どうしようか。」

「お前らリバーサイドなめんなよ！味噌汁つかねえんだぞ。」

『お前は黙つとけ！！』

しゅんとした公平をしりめに三人は話を進める。はみ出された公平がふと柵の整理した段ボールの中からとある楽譜を見つけた。

「なんだこれ？」

ふと手に取ると「サマーデイズ」と書いてある。

「サマーデイズ？何の曲だこれ。ん、なにに？作詞作曲・・・山本・・・これって!？」

その曲はなんと前の軽音部が作ったオリジナル曲だった。「オイ、お前ら。なんか楽譜見つけた・・・」

「だから黙って・・・ん？楽譜？」

思わず言いかけた言葉を引っ込め、3人は楽譜を持った公平の元へ集まった。

「ほら、この楽譜。たぶんっつか、絶対前の軽音部の人たちのオリジナルだぜ。」

「ホントだ。どれどれ。」

ハルキはその楽譜を見たが、実際のところ楽譜を読むのは苦手だ。「うーん、無理だ。薫パス。」

そういつて薫に渡した。そして薫はまじまじとその楽譜を見ていた。「・・・うん。やっぱり。」薫はうなずいた。

「何がやっぱりなの？」  
咲が尋ねる。

「この前みんなビデオみたでしょ？前の軽音部の。この楽譜、たぶんその時の演奏してたやつだよ。」

「えー!」

プレハブ内は驚きに満たされていた。

「あの曲コピーじゃないのかよ。すげーな、前の軽音部。」

「他にも楽譜無いかない？」

「なんかまだあるみたいだぞ。」

公平が段ボールに入っていた他の楽譜を取り上げた。

「えーっと、エブリデイズ、スカイデイズ、ブラックデイズ、ザ デイズ・・・タイトルデイズばっかだな。」

「でも、タイトルは別として中身は確かだよ。」

「なあ、これもやらないか？」

ハルキの提案に3人は

「いいよ」

「いいけど」

「いいぜ」

と満場一致。

こうして、とりあえずやる曲を決めた軽音部だった。

e p i 4 (後書き)

コメントや評価をお願いします。

e p . 1 5 ( 前 書 き )

間が開きすぎてすいません。いろいろと忙しく更新が凄まじく遅れてしまいました。楽しんでくれたら幸いです。

やる曲が決まったハルキ達はおの自分の担当の楽器の練習に励んだ。比較的薫と咲は楽譜をさらうのが早いが、ハルキと公平は慣れてないせいかとでも遅かったが、薫や咲に助けてもらいなんとか弾けるようになった。

「ふうー、なんとか形にはなってきたかな。」  
薫が合わせを終え呟くと

「三回に一回くらいの成功率だけどね。」  
と咲が釘をさすように言った。

「でもよー、歌詞がないと、なんか寂しいよな。」  
とハルキを見て言った。

「しょうがないだろ。人前で歌うの恥ずかしいじゃん。」  
とハルキは人前で歌うことに慣れて

てないようだ。

「でも、歌わなきゃただの音楽だけじゃん。」  
そりゃそうだと他の2人も頷く。

「でも、歌に自信ないし。」  
「そんなことないよ。イイ声してるし。」

迷うハルキを薫が後押しする。  
「そうかな？」

薫から褒められちよっと嬉しそうに頭をかく。

「まあ、なんにせよ。一回歌ってみてよ。あたしハルキの歌声聞いたことないもん。」

「えっ、ここで？」  
「じゃ、これから放送室乗っ取ってくるか!!」

「いや、なんでそこまで本格的なんだよ。」  
「いいから、歌ってみなよ。僕も聞きたい。」

みんなの視線がハルキに集まる。それに伴って顔が赤くなっていく

ハルキ。

「うう・・・じゃ、じゃあ歌います。・・・下手でも笑うなよ。」  
とハルキは緊張するなか、一つ咳払いをし口を開いた。

衝撃だった。その歌声は力強く鼓膜を揺さぶり、パワフルだった。  
三人はたまらず鳥肌がたった。

「っ・・・どう？」

サビの部分进行を歌い終え、不安そうにみんなの顔色を伺う。

「いや、なんていうか。予想外かな。」

薫が目を見くして呟いた。

「やっぱ、オレってそんなに下手かな？」

「いやいや、その逆だって。上手いよ。すごい。」

あの咲が素直に褒めた。一方、公平は

「やっぱオレの目に狂いはなかった。お前、トイレでの鼻歌上手いもんな。」  
「そりやどうも。」

褒めてるのが微妙なコメントだった。

「とにかく音程がたまにズレたりするけど、凄い武器だよ。ハルキの歌は。でも人前で歌えないっていうのが。」

薫が腕組みをしながら悩む。

「それならイイ考えがあるぜ。」

と公平が拳手した。

「イイ考え？」

「ああ、任しときな。」

公平は何か思いついたとばかりに笑っていた。  
ハルキは何か嫌な予感がした。

「とにかく、今日、駅に集合な！」

「えっ、駅？なんで駅なんかに。」

ハルキの質問を振り切り

「いいからおいちゃんに任せな！！」

と自信満々に胸を張った。

駅。。。

駅に集まったハルキ、薫、咲の3人。

「公平のやつ。自分から集合かけといて遅刻かよ。」もうかれこれ30分ほどこのままの状態だった。

皆待たされ咲はさつきから腕組みですつと顔をこわばらせている。

「でもなにするんだろ。どっかに行くのかな？」

薫がニコニコしながら言った。彼だけは楽しそうだ。

「あれじゃないの？ストリートミュージシャンみたいに路上でやれるな感じじゃない？」

咲がイライラしながらいった。

「いやいやいやいや、そんなでたらめなわけないだろ。ていうかそれ嫌だし。」ハルキが必死に全否定した。

「ただ適当に言っただけよ。」

「なら良かった。・・・あつ、公平だ。」

なにやら背中に大きな荷物を持ってこちらに走ってきた。

「おーまーたーすぐわあ！」

公平が到着するやいなや、顔面に膝蹴りをクリーンヒットさせた。

「・・・」ピクピクツと動き公平の意識は遠く遠く逝った。

「あー、スツキリ」

と咲がにこやかに言った。

さらに30分後。。。

「いやー待たせたな！」

鼻血を出しながら公平が言った。さつきまで、倒れていたのがウソのようなテンションの高さ。

「あれ？咲様と薫は？」

「咲は遅刻したお前に膝蹴り食らわせるために待ってたんだって。

で薫は咲一人じゃ心配だからって一緒に帰ったよ。」

「いやいや、咲様心配いらないだろ。まあ、いいや。ハルキお前がいれば。そうお前がいればオレは何もいらぬ。」

また公平の変なスイッチが入ってしまった。

「本当に僕以外なにもいらぬなら、その命捨ててくれ。」

「またまた面白いことをいう。」

このテンションの高さ、何をしでかすのか。

「でなにをするんだ。」

「ふふふつ、これ見る!」

そついうと背中の中のギターを指指した。

「何それ。」

「これはアコースティックギターといつて五本の弦からなる・・・」

「じゃなくて、なんでギター持つてんの?」

「よくぞ聞いてくれていた。今日はハルキに路上ライブをしてみます。」

咲の予想が的中してしまった。

「いやだよ!誰がやるか。」

「やらないと・・・やらかすぞ。」

「何を?」

結局得体の知れない脅しのせいでやるはめになった。重々しくアコースティックギターをからうハルキ。

「何歌えばいい?オリジナルじゃみんな知れないだろうし。」

「うーん、じゃビートルズでいつてみようか。」

(なんかコイツみてるよ、ボコリたくなるなあ。)

そんなこんなでビートルズのLet it beを歌うことになったのだが、ハルキはなかなか歌えずにいた。

「おいっ、ハルキ。いつまでつっ立ってんだよ。」

「わかつてるよ。」

冷や汗が額から流れ行くのを感じながら、ハルキはやっとその閉ざしていた口を開いた

when I find myself in

声が上がらず小声で、明らかに緊張していた。通りすぎていく人目がいたい。

「ハルキには無理だったかなあ。いい作戦だと思ったんだけど。」  
公平が半ば諦めていると、サビにかけハルキの声がだんだん変わっていった。

（このままじゃ、ダメだ。もっと声出さないと、もっと歌わないと。）  
ハルキは目を閉じ、周りを見ないようにすることでどうにか緊張に打ち勝とうとした。

l e t i t b e l e t i t b e  
l e t i t b e l e t i t b e

「おつ、ハルキノつてきたな。」

変化はハルキだけではなかった、公平が振り返るとちらほらハルキの歌声に足を止める者も出始めた。

「すげーな、やっぱハルキは。」

公平は改めてハルキを感心した。

「あー、ハズかった。」

「さすがだなハルキ。じゃ、もう一曲歌うか。」

「まだ歌うのかよ?」

「当たり前だろ。」

「わかったよ。」

そういうと、ハルキはまた歌い始めた。ちょっと慣れ始めたのか今度は最初から声がでていた。そして、それに伴って人も集まり、公平の顔も微笑んでいた。

「よーし、今日はこれくらいにするか。結構貯まったし。」

「ああ、……って貯まったって何が?」

「これ。」

と言うと公平は小銭の入った空き缶を手を取った。

「Hey! what's this?」

「Oh! it's money!」

「リヨウシタカコウヘイ?」

「ヒトギキノワルイデース。オテツダイシテモラッタデース。」

「May I destroy you, OK?」

「NO Thank you. ぐふっ!」ハルキの右ストレートが公平の腹を打ち抜いた。

本日二度目の公平ダウン。こうしてハルキの路上ライブは幕を閉じた。

「よし、やっと放課後だー！！部活行くつぺよ。ハルキどん。」  
公平がぺったんこのバッグを抱え、やってきた。

「ハイハイ、わかってるよ馬鹿どん。あ、ちょうど咲も来た。」  
隣のクラスから咲がやってきた。

「おすっ、咲どん。あれ？薫は？」

「よっ、ハルキ、カスどん。薫君なら、委員会の仕事で後から来る  
つて。」

「そっか、じゃ、早速プレハブに行きやすか。……お前ら馬鹿  
とかカスとかってなんだとお、おい。」

「遅せえよ！！」

「嗚呼、久しぶりの突っ込み…もつと突っ込んで〜！」  
公平のウザイテンションに「咲先輩、ヨロシク。」

「りょーかい。」

というとき咲が前に出て

「なんでや…ねん！！」

咲の裏拳が突っ込まれた。ドン、鈍い音が響く

「……最近マジで…扱い…がひどい。」

そういうと彼は膝から崩れ落ちた。

「じゃ、行きますか。」

「そうね。」

そういうと、ハルキと咲は公平を引きずり屋上のプレハブへ階段を  
登っていった。

「お二人 ガタ さん？ 階段 ガタ は 引きずら

ガタガタ ない ゴツ！ あ、今頭打った

ゴツ ツウドウ、舌噛んだ！」

・・・

「失礼しましたー。」

薫が職員室から出てきた。「ふうー、さあ急いでみんなのここ行かなきゃ。」

急いで階段の方に向かおうとすると、校長室から何やら男性が出てきた。

その男性の姿に、薫の表情が固まった。

「な、なんで。」

薫の存在に気付いたのか、その男性がこちらを向いた。そして、手を振る。

「なんで、ここに…父さん。」

その男性はなんと薫の父親だった。

「大きくなつたな…薫。」…

「薫遅くないか？」

ハルキがギターの弦を交換しながら言った。

「そういえば、確かに遅い…薫君どうしたのかな。」

「あー、傷だらけの公平だよ。brokenミーだよ。」引きずられあざができた、公平が保健室から帰ってきた。

「なあ、公平。薫見なかったか？」

「ああ、薫なら。なんか男の人と話してたなあ。しかも、珍しくあの薫がガーって声を荒げてたな。親父かなあの人。」

その言葉に咲がピクつと反応した。

「その話本当!？」咲が公平の胸ぐらを掴み迫る。

「いや、わかんねえけど。薫その人に”アナタ”って言ってたし。でも、あの感じは親子っぽかったしな。」

ごまつく公平を突き放し、扉を蹴り開け走ってってしまった。

「おい、咲!何処行くんだよ?」

そう尋ねるハルキに、

「薫君とこ。」

と振り向きもせず、階段への扉も勢いよく開け走り去っていった。

「な、なんだつたんだ。」

公平はキョトンとしている。

「とりあえず、行ってみよ。ホラ、早く。」  
二人も急いで、後を追った。

「薫！こんなとこいたか。」ハルキが渡り廊下を歩いていた薫を見つけた。

「あ、ハルキ君。ゴメン、部活大分遅れちゃって。」頭をかきながらニコツと笑った。

「もしかして心配かけちゃった？」

「いや、まあ、そうなんだけど。咲がさあ、薫探しに勢いよく飛び出すもんだから。なんか”薫の父親”て聞いたら急に。」

「そうか、さつちゃんか。」そう呟くと、苦笑いした。「なあ、薫のお父さんが来てたのか？」

「たまらずハルキが尋ねてみた。」

「うん、それが…。」

そのとき

「薫君！！お父さん来てたの？」

咲と公平が合流した。

「うん。」

少し間を置き、うつむき頷いた。

「それじゃ。」

咲も悲しそうに、うついてしまった。

「な、なんだよ？二人だけで納得すんなよ。」

公平が二人に言う。

「何かあるなら話してくれないか。」

ハルキが二人に問いかけると

「俺から説明しよう。」

そこに現れたのは、蔵田先生だった。

「先生知ってんの？どうゆうことなんだよ？二人とも様子が変で。」

「その事なんだが、薫の父親知ってるか？」

先生の質問の意味がわからずハルキはキョトンとした。

「いったい、それが何の関係があるんですか？」

「そーだよ。薫の親父知ってるわけねえだろ！」

公平にいたっては、半ギレだった。

「それじゃ、椎名隆道は知ってるか？」

「えっ？」

「まさか！あの外国のコンクールでグランプリとりまくった、めっちゃくちゃ有名なピアニストの？」

「名前は聞いたことあるぜ。」

「そう。」

咲が呟く。

「薫君はその椎名隆道さんの息子なのよ。」『えー！！！？』

二人は声を揃えて叫んだ。「マジかよ！？」

「公平お前、顔見たのに気付かなかったのかよ！」

「いや、だって顔よく見てなかったし。テレビとなんか雰囲気違ってたしよ。あー、だから咲様急いで行ったのか。サインでも欲しかったか？」

公平が咲をからかうが

「そんなんじゃないわよ！あたしが心配してたのは。」

咲が怒鳴る。

「さっちゃん。」

やっと薫が口を開いた。

「実は僕、軽音部辞めるかも……」

『……え？』

衝撃的な言葉に、二人は時間が止まったように固まった。

「薫マジで辞めんのかな。」

「……わかんないけど。」

「……………」

薫の思いもよらない発言に、ハルキ、公平、咲の三人は部室の中で暗い雰囲気をかもしだしながらうなだれていた。

薫はその後、やはり居ずらくなつたのか帰宅してしまった。その方が事態をまだ飲み込めてないハルキ達にとって良かったのかもしれない。

「なあ、咲は知ってたのか。」

薫の事にいち早く反応した咲なら、何故薫があんな事を言ったのか分かると思ひハルキは言った。

「…お父さんが来たつて聞いて、まさかと思つたけど本当に最悪な状況になるなんて。」

……………

20分前。

「な、なんで？そんな急に。」

驚きのあまり固まっていた公平がやっとまだあんぐりあいた口できいた。

「……………」

なかなか続きが言えない薫に、蔵田が説明する

「やはり俺が言おう。さつき薫のお父さんが来て、薫を留学させたいと申し出てきたんだ。」

「留学？どこへ。」

「オーストリアだ。」

「オーストリア？なんでそんなところへ。」

あまりの事の衝撃で、二人は思考回路が停止したようになっていた。「ピアノのためだ。オーストリアは知つてのとおり音楽の本場だ。」

そこで薫を一流のピアニストにするために連れていかれるそうだ。まあ、学校としてもすぐ留学にはいかないから今日は一応その留学の理由などを聞いてたんだ。」

「一流の」

「ピアニスト……。……。」

「留学か？」

「つつつても、事実上ピアノ専門に勉強すんだから自主退学だよな。」

「自主退学！？」

ハルキは退学という文字に思わず反応してしまう。「おかしい。」黙っていた咲が呟いた。

「え、何が？」

公平が尋ねた。

「いや、今まで留学の話はあったけど薫君はずっとそれを拒否してきたのよ。高校だけは日本で通いたって。だからそんな数ヶ月でやっぱり留学だなんて。どうして急に考えが変わったのかわかって。」

「そうだったんだ。」

不安と謎だけが、そこにはあった。

「まあ、とにかくあれだ。今日はもう帰るか。明日それも含めて薫と話せばいいんじゃないか。」

「それもそうだな。」

そういつて帰ったものの、みんなその夜は眠れなかった。

そして、次の日から薫は学校を休んでいた。

「僕はどうすれば…。」

電気も付けず薫は暗い部屋で一人膝を抱えていた。

「はあ〜。」

ここ数日薫はずっと悩み考えていたが、ため息ばかりでいい方法も思いつかなかつた。…ハルキ達に辞めると告げる方法を。

・・・

「なんでここに…父さん。」

「大きくなつたな…薫。」

薫の目の前には、父隆道の姿があつた。

「何しに来たの。」

冷たい口調でいう薫。それは明らかに父を警戒していた。「いや、何しにつて可愛い息子の顔を見るに。」

「ごまかさないですよ!。」

薫の声が廊下に響く。

「わかつた。わかつたから大声だすな。周りに迷惑だろう。」

薫の怒鳴り声とは裏腹に、隆道は他人事のようにほわんとしていた。

「薫。オーストリアに留学しなさい。お前の為だ。」

薫が予想していた通りの言葉が父の口からでてきたことに、薫はうんざりしていた。

「なんで今さら。高校まで待つてくれる約束だったよね。絶対に行くもんか。」

吐き捨てるように目を合わせず父にいい放つた。

「……時間がないんだ。」

「え?」

「私にはもうそんな時間はないんだ。」

「さっきからなんのこと言ってるの?」

理解不能の父の言葉に薫はもどかしく感じていた。

「とにかく、時間が無いのかもしれないけど、僕には関係…」

「ガンなんだ。薫。」

「……えっ？」

唐突にでてきた衝撃発言に薫は、頭が真っ白になった。

父が言うには、末期のガンらしい。本来病院で治療に専念するべきなのだが、父隆道はあえてピアノのをひきつづけた。感動をより多くの人々に与えるため。だがそれと引き換えに命の火はだんだん弱くなっていった。そこで死ぬ前にやり残したこと、薫をプロのピアノリストにすること。そして、自分と同じように多くの人に感動を与えてほしいと。

「行ってくれるな？」

父の問に”うん”と頷くしかなかった。

「ありがとう。」

そついうと父隆道は去っていった。

結局薫はハルキ達に納得させられる言葉を見つけれず、ろくに学校に行けないままついに別れの日が訪れてしまった。

学校への道のり。薫は自分の足が鉛のように重く感じ気分は重々しかった。しかし、学校は気持ちとは裏腹に訪れた。

「あゝ、消えたい。」

憂鬱を引き連れて薫は昇降口に入った。

・・・

「…というわけで我が高校のあの有名なピアニスト椎名隆道さんの息子、椎名薫君が留学…」

薫が留学するということで学校が開いた集会でも、薫の心はそんなことよりハルキ達のことと頭がいっぱいだった。

「こんな集会…みんなの前で出られないよ。」

泣きそうなくらい追い詰められていた薫。

「…では椎名君から一言。」「さあ、椎名君」

「…はい。」

先生から呼ばれステージに迎う薫。もう何もかも投げ出したい気分だ。

「えーっと、今日は僕の為にこのような会を開いていただいてあげがとつございます。」

複雑な気持ち押し殺し、作り笑いでお決まりの文句をならべる。

「僕は短い間でしかたけど、この学校でみんなと過ごさせてよかったで…。」

そんなスピーチの途中、急に頭の上から何やら聞こえてきた。

「なんだ、なんだ？」

「何か聞こえてくる。」

「音楽だ。」

生徒達が騒つく。

「私語はつつしめ！静かに。」

先生は慌てる。

「これは。」

薫は生徒の中にハルキ、公平、咲が居ないのに気が付いた。

「まさか！」

薫は思わず蔵田の方をみた。すると蔵田は薫の方を向き黙って頷き、  
”行ってこい”というジェスチャーをした。

そして薫は頷き返すと、ステージを降り体育館を出て行った。

「待ちなさい、椎名君。」

もう教頭の声は薫には聞こえない。

廊下を走り抜け、いつもなら普通に昇るだけでも息が切れる階段を  
4階まで一気にかけ昇る。そして屋上への扉にたどり着き、ドアノ  
ブに手をかけた。その時、一瞬躊躇したが意を決して一気にひねり  
扉を開けた。

そこには、演奏している三人がいた。

「みんな…」

数日前

「どうしたらいいんだ。」

ハルキも同じく悩んでいた。恐らく薫が行ってしまってもう時間  
はないだろう。

「薫を引き止めたい。でも薫は本気でプロピアニストを目指して  
るんだ。その意志を大事にしたいし…」

何より薫が一番辛い立場に立たされ苦しんでいるとわかっていた。  
優しい薫のことだから、きっとハルキらを裏切ることになると思  
うかもしれない。

「…どうしたら。」

ハルキが誰も居ない部室で頭を抱え悩んでいると。

「なんだまだいたのか。」

ドアを開け蔵田が入ってきた。

「先生。」

「……どうせ薫のことだろ。」

「やれやれという顔でハルキの隣に座る。」

「先生、僕どうしたら。」蔵田は一息つき口を開いた。

「どうしたらつつつても正直オレにも分からない。だが何が正しいかとか何が間違ってるかなんて誰にも分からない。ただこれだけは言ってみよう。」

「そうとうとハルキに顔を向け一言」

「後悔だけはするな。」

「そうとうとニッコリ微笑み「しかも、”僕”じゃなくて”僕達”だろ。」

その瞬間また扉が開き公平と咲が現れた。

「な？」

「みんな。」

公平が笑顔で

「お前水くせえぞ。」

「といいながらハルキの頭をぐしゃぐしゃに掻き乱した。」

「ハルキだけの問題じゃないんだから。」

と腕組みしながら咲が言った

「そうだよな。」

「そうそう調子のもつて、なんかカツコいいこと言っちゃってる人いるし。」

公平が細い目をして蔵田をみた。

「茶化すな！あー、ヤバイ。顔熱くなってきた。」

蔵田は顔を真っ赤にして。

「とにかく、後は三人でよく話し合え！じゃあ！」

「ボタンツ、と勢いよくドアを閉め足早に去っていった。ハルキは心の重荷が軽くなったような気がした。」

「でどうしようか。」

咲が切り出した。

「僕は正直薫が行くのは淋しいけど、アイツの夢だし。送り出してあげたい。」ハルキが2人を見る。

「オレも同じ気持ちだ。」

公平は笑顔で返す。

「あたしは…。」

咲は俯き、一息間にいれ、「あたしも送り出してあげたい。」と訴えるように言った。

「やっぱりみんな同じ気持ちだったな。よかった。」ハルキは安心したように頷いた。

「でもどうやって送り出だすんだ？」

公平が尋ねた。

「問題はそれなんだ。」

腕を組みうーん、と唸る二人。そこに咲が

「あたし軽音部なんだから、やる事といったら…一つだけでしょ。」

「あ、なるほど。」

2人はポンと手を叩いた。「そうと決まれば？」

「だな。」

それからずっと部室から、音が流れ続けた。

「みんな…。」

薫は演奏している姿を見て言葉がでず、たまらず涙が溢れでてくる。

「僕てつきりみんな裏切られたって思ってるんじゃないかって。それでそれで。」

自分自身を責め続けていた薫だったが、3人の音楽から伝わってきたのは

薫、別れるのは寂しいけどいつも俺達は応援しているよ。

というメッセージだった。「みんな…ありがとう。…本当にありがとう。」

友を送り出す歌はいつまでも青空に鳴り響いた。

「薫もう出発したかな。」

あの屋上で3人は空を見上げていた。

「もうすぐじゃない？」

「それにしても教頭しつこかったなあ。」

あの後3人は教頭からこっぴどく1時間以上叱られた。

「まあ、承知で無断でやつちやつたし。」

ハルキは苦笑い。

「まあ、それもそうだけど…あ、飛行機。」

公平が空に行く飛行機を指差した。

「あれに薫君乗ってるのかな。」

「多分ね。」

3人はずっと真夏の青空を眺めていた。

真夏の青空の下、蝉のこれでもかという程の鳴き声に苛立ち、ペタ  
ンコの何も入っていないカバンを肩に担ぎ、とうに登校時間を過ぎ  
た校舎に向かう一人の男子生徒の姿があった。

「…ツチ！」

停学がとけ、久々の学校だが厳しい暑さにまた苛立つ。

「…ツチ！」

そして再び舌打ちしながら、靴に履き替えダルそうに校舎へ入って  
いった。

「ぶああぶうい、蒸しぶああぶうい。」

薫が留学してから一週間がたち、薫の居ないやつと雰囲気にも慣れ  
始めた頃、夏の気候に公平は嘆いていた。

屋上にあるプレハブで作ってある部室には、もと倉庫だけに冷房器  
具は一切なくしかも周りのコンクリートの照り返しに、部屋の中は  
サウナ状態になっていた。そんななか、公平は机に溶けるようにう  
なだれていた。

「ぶああぶうい、ぶああぶうい、ぶああぶうい…。」

「ちよつとつつさいわよ。」

サー イワンのアイスを食べながら咲が言った。

「あー、なに一人だけいいもん食べてんだよ。俺も食べたーい！食  
べたーい！」だだをこねる公平の背中に、アイスを食べていた咲が  
さつと素早く何か白い物を投げ入れた。

「…冷たっ！！つてか痛い！え、なに！？冷たい、痛い、いめたい  
…！！」

背中に入れられた異物にあたふたしながら、シャツをズボンから出  
した。すると、中から白い固形物が出てきた。…白い煙をに包まれ

た。

「なんだ…ドライアイスか、優しいなあ、咲様。俺の為にわざわざ冷たいドライアイスをそっと背中につて、火傷するじゃね〜か！お前はツンツンか？」

ツンデレのデレがないツンツンなのか？」

顔を真っ赤にし背中をさすりながら、踊り狂う公平。「いや、欲しいって言うから。」

スプーンでアイスをすくい、咲は涼しげにそれを口へと運んだ。

「このツンツン娘！」

「いや、ツンツンつて…なんだよ。」

「おいおい、ツッコミにキレがないぞおハルキ！」

ハルキの返しに、公平が両腕を組み真面目な顔をした。

「お前はただでさえキャラがフツーなんだから、ちゃんとツッコミを入れなきゃ。」

「…キャラがフツー。」

そう呟くと、ハルキはムクツと立ち上がり公平を背にしゃがんだ。そして、そのままうずくまってしまった。

「ちよつ、おいハルキ？もしかして落ち込んだ？ゴメンゴメン！いや、ハルキはフツーじゃないつて。なんていうか、アレだよ、アレ…なんていうか。」

言葉が見つからず、しどろもどろになる。そしてそれが生み出す沈黙がかえってハルキの心を締め付け、また落ち込んでしまった。

「だあーもう、ゴメンゴメン！いや、ハルキがフツーじゃなくて俺らがおかしいんだよ。」

あたふたしながら言い訳を重ねる公平。そんな騒がしい状況の中、部室のドアが開いた。

「お前ら何やってんだ。」

蔵田が呆れ顔で入ってきた。ドアを閉めた。シャツの第一ボタンは開けられており、袖は捲り上げられていた。

「おい先生いいのかよ、そんなに着崩して。服の乱れは…この世の

「乱れた。」

「俺の服装にそんな大それたモンはかかってねえよ。」

「おゝ、さすが先生！ツツコミをバシッと決めてくれるぜ！」

「そんなことはどうでもいいんだ。」

軽く公平をあしらうと、蔵田がばつが悪そうな顔をした。

「今日教頭から言われたんだが、お前ら薫が抜けて3人だろ。」

確かに今まで4人だったが、薫が抜け3人になった。

「でだ、お前らは軽音部として一応活動してるが。3人じゃ、部活としての活動を認められないんだ。」

その言葉に、うずくまっていたハルキが立ち上がった。

「じゃあ、この部室はどうなるんですか？」

「…まあ、没収だな。」

みんなの動きが固まった。咲のスプーンからアイスが滴り、制服に落ちた。

「…なんだと〜！！！」

3人の叫びが真夏の空に響きわたる。

「部室没収か〜。」

ハルキがため息混じりにうなだれる。

「まあ、でもあと一人入れればいいんだろ。」蔵田の話はこうだった。

「この学校は部の認定には最低4人必要なんだ。だから、今のままだったらお前らは部活として認められず同好会になる。」

「別に同好会でもいいんじゃないの？ギターとベースとドラムがあればバンドはできるし。」

咲がスカートに着いたアイスを拭き取りながら言った。確かその3

つがあればバンドとしては十分成り立つ。

「まあ、そうなんだが。ウチは文化部は最低4人は必要なんだよ。」

「そうだ！バンドとしては成り立つんだからそこそこなんないのかよ！」

突っ掛かる咲と公平に、

「まあ、俺もそうは言ったんだが。他の部との兼ね合いもあるし、お前ら薫を送り出す為に無断で演奏やつただろ。」

「あつ。」

ハツとした。確かに先日3人は薫の為になんの許可もとらず演奏した。

「先生達中にはあれを快く思っていない人もいるんだよ。だから、これ以上勝手を許してはいけないという意見も出てる。」

厳しい現実には3人は黙ってしまった。ただでさえ、薫が去ってしまったのに部室までも失ってしまったのか。「だが。」

沈黙のなか蔵田が口を開いた。

「方法がないわけじゃない。」

その言葉にハルキ達は、反応した。

「なんですか、その方法って。」

ハルキが尋ねた。

蔵田がニカツと笑い言った。

「もう一人誘えばいいんだ。」

「とは言ったものの。」

咲がポケットに手を突っ込み顔をしかめた。

3人は蔵田に言われた通り勧誘に出て、今は廊下を歩いていた。

「もう7月よ。大抵の新生は部活にとっくに入ってるわよ。」  
と不満を呟く。

「だよなあ。しかも俺ら2人の時も相当苦労したし。」

「そうだよな。薫と咲が入ったのは奇跡みたいなようなもんだし。」  
「だよなあ。」

やはり、簡単にもうひとりとはいきそうにないようだ。

「まあ、とりあえずポスター貼っとくか。」

そういうと、公平は廊下の掲示板に以前作ったポスターを貼った。

「なにこれ？」

「なにつてポスター。」

「………なんの絵？」

「バンドの絵に決まってるじゃんかよ。」

貼られたポスター(?)を咲がビシャッと剥がした。

「あー、なにすんだよ。」

「なにつて、こんな地獄絵図みたいな下手くそ絵みて誰が入ってるのよ。」

「おい!? 地獄絵図はいいけど下手くそはねえだろ。」

「いや、なんで地獄絵図は受け入れるんだよ。」

剥がしたポスターをくしゃくしゃにし、

「とにかく、これは駄目。」そしてそばにあったゴミ箱に捨てた。

「あゝ、俺の力作が。」

公平はその場で泣き崩れた。

「おいおい、そんなシヨックなのか? まあ、落ち込むなって。」

ハルキが自分が書いた別のポスターを張りながら、慰める。

「…俺の…地獄絵図が。」

「やっぱり地獄絵図じゃねえーか!!」

咲がゴミ箱を両手で持ち上げ、公平に投げつけた。

「ちよつと咲様。つくふ!」投げつけられたゴミ箱は公平の頭にクリーンヒット。「自業自得だな。」

何食わぬ顔でポスターを綺麗に貼り終えたハルキ。

「じゃあ、次の掲示板いくぞ。」

「そうね。」

両手をパンパンと叩いてホコリを落としながら咲はまたポケットに  
手を突っ込み、歩きだした。

「おいてくなよー、2人とも。あれ？廊下が歪む。」  
ふらふらしながら公平は、2人の後を追った。

3人が去った後、掲示板に立ち止まる1人の少年がいた。

「……ツチ。」

少年はポスターの絵を見ながら、また舌打ちをした。

e p . 2 1 (前書き)

なんか書き方とかまとまっていなくて、統一感なくてすみません。しかも、間あいて…しかも、短いという…

昼休みの教室。賑やかな教室内の雰囲気とは対象的に、ハルキと公平はなかなか部員が入らず廃部、という危機にうなだれていた。

「このままじゃホントやばいなあ。」

ハルキがジュースのストローを噛みしめる。

「確かに……シヨリ。」

公平はうんまい棒を噛みしめる。

「やっぱり今からじゃ…誰も入らないのか。」

「確かシヨリに」

「なんとか作戦たてないとなあ。」

「シヨリかに。」

「公平？」

「シヨリ？」

「……シヨリシヨリシヨリシヨリうるさいんじゃないか！……！」

ハルキがジュースのパックを投げつける。

「うわっ！ジュースが！やめるシヨリよ。」

「語尾みたいになってるじゃねーか。」

「シヨリ〜。」

「ちよつと!?!」

揉み合いの中教室に咲が、息を切らし入ってきた。

「どうしたんだ？」

「大変なのよ!ポスターが。」

珍しく咲が慌ている。

「ポスターが、地獄絵図？」

「あーもう、いいから来て！」

公平のうつつとうしいボケを断ち切り咲はまた廊下を走りだした。それに続き2人も咲を追い掛け走りだした。

「なんだよこれ…。」

「だれが…。」

咲が連れてきた場所はポスターを貼った掲示板。そこには、引き裂かれたポスターと廊下にはその残骸がぐしゃぐしゃに丸められ捨てられていた。

しばらくハルキと公平はその衝撃的な光景に立ちすくんでいた。そして、まさかつ、と2人は顔を見合せ走りだした。

「やっぱりか。」  
そう呟きながらポスターの残骸を拾いあげるハルキ。そして、掲示板をずつと見つめる公平。

「明らかにこれは嫌がらせだ。」

そう、他の校内の掲示板に貼られていたポスターもごく丁寧に引き剥がされていた。

「2人とも……ッ!？」

追い付いた咲もその事実気付いたようだ。

「一体だれがこんなこと。」

「わかんないけど……くそつ。俺らがこんなことやられるような悪いことしたかよ。」

「……んなわけないだろ。」

そう言う公平の顔は、いつも見せるひょうきんな雰囲気のかけらもなく、歯を食い縛り怒りがにじみ出していた。

「公平？」

咲は見たこともない彼の表情に、声を掛けるのをためらった。

「ぜってー、許さねえ。」

そういうと、公平は壁を右の拳で思い切りなぐると、どこかへと歩き去った。

こんな公平は初めてだ。

「公平どうしたのよ。」

今までの公平とは想像もつかないような豹変ぶりに、咲は動揺が隠せない。

「あいつはイジメとか、こつというのが許せないんだよ。」

そういうと、ハルキは掲示板の残った部分を外しだした。

「そんなにアイツ正義感溢れるやつなの？」

「いや、そういうんじゃないよ……」

外した部分をまとめ、ゴミ箱に捨てる。

「トラウマっていつのかな。」

「トラウマ？」

ハルキは去る後ろ姿を黙って見ていた。そして、あるきだした。

一方咲は、いまだ訳がわからないという風に首をかしげた。そんなとき、ふと背中に視線を感じ後ろを振り返った。

だが、そこにはいたって怪しい人物は見当たらなかった。気のせいかと、振り返ると

「…ツチ！」

と明らかに大きな舌打ちが聞こえた。

ハッと、前に視線を戻すと、そこには腕を組み窓ガラスに寄りかかっている1人の男子生徒がいた。

「なに？なんか用？」

咲はその男子生徒に睨みをきかせた。

「…フツ」

そう鼻で笑うと彼は何処かへと去ってしまった。

「なに、アイツ。」

なんだか全てがスッキリしないまま、2人の後を追うことにした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6872g/>

---

S o u n d s

2010年12月10日20時01分発行